三重県埋蔵文化財調査報告 52－1

桑名郡多度町

天王平遺跡発掘調査報告Ⅰ

1982

三重県教育委員会

序

多度神社の鎮座します多度町は、木曽三川を臨む豊かな土地にめぐまれ、古代より人々が住みついた所と考えられます。それは倭姫命の野代宮をはじめ日本武命の尾津前の故事を伝える話や、多度神社の御神宝、柚井貝塚の出土遺物を一覧して頂ければおわかりかと思います。

今回ここに報告することになった天王平遺跡は北勢地方でも有数の遺跡として著名なもので、古くより縄文土器をはじめ、奈良時代の土馬など多数の遺物を出土しております。この遺跡が主要地方道四日市多度線改良工事によって一部分が破壊されることになったため、事前に発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、奈良時代および平安時代の竪穴住居、掘立柱建物など当時の集落の一部を検出することが出来ました。この調査報告が地元の文化財保護ならびに歴史研究の一助になれば望外の喜びであります。

最後に発掘調査にご協力を賜った関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和57年3月31日

三重県教育委員会

教育長　佐々木昇

例　　言

1．本書は主要地方道四日市多度線改良工事に伴う桑名郡多度町小山所在の「天王平遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．発掘調査は次の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

費用負担　三重県土木部

調査担当　三重県教育委員会文化課

技師　谷本鋭次

主事　山下雅春

埋蔵文化財研修生

久志本鉄也（東員中教諭）

本堂　弘之（大成小教諭）

調査協力　三重県土木部

道路建設課・桑名土木事務所

多度町教育委員会

多度町小山地区（小林徹区長）

株式会社石川組

3．発掘調査後の遺物整理・報告書作成は研修生久志本・本堂が行ない、全体を谷本がまとめた。なお、遺物撮影は、文化課技師吉水康夫による。

4．Ⅲ－4の水谷氏、伊藤氏の所有地から出土した土器は両氏のご好意により本書に記載させて頂いた。それぞれ出土した地点は第2図のA、B地点である。

5．本書の遺構標示は下記による。

ＳＢ；竪穴住居・掘立柱建物

ＳＫ；土坑　　ＳＤ；溝

ＳＸ；その他

6.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……2

Ⅲ　遺構と遺物……6

　1．竪 穴 住 居……6

　2．掘 立 柱 建 物……16

　3．溝 ・ 土 坑 等……19

　4．その他の遺物……24

Ⅳ　結　　語……27

図 版 目 次

ＰＬ１　遺跡遠景
ＰＬ２　調査区西部分近景
　　調査区東部分近景
ＰＬ３　ＳＢ１・２・３
　　ＳＸ12・13
ＰＬ４　ＳＢ14・15　ＳＤ16
　　ＳＢ17・18・19・20　ＳＤ23
ＰＬ５　ＳＢ45　ＳＫ52
　　ＳＢ48
ＰＬ６　ＳＢ42　ＳＤ41
　　ＳＢ38
ＰＬ７　ＳＤ34　ＳＢ35・36
　　ＳＤ26　ＳＢ28
ＰＬ８　出土遺物
ＰＬ９　出土遺物
ＰＬ10　出土遺物

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　遺跡地形図……3
第３図　遺構平面・挿図配置図……4
第４図　ＳＢ１・４・５、ＳＫ７実測図
　　遺物実測図……7
第５図　ＳＢ２・３、ＳＫ８・９、ＳＤ10実測図
　　遺物実測図……8
第６図　ＳＢ14・15、ＳＤ16実測図
　　遺物実測図……9
第７図　ＳＢ17・18実測図……10
第８図　ＳＢ19・20・22・24・25、ＳＤ21・23実
　　測図　遺物実測図……11
第９図　ＳＫ39・40、ＳＤ41、ＳＢ42実測図
　　遺物実測図……12
第10図　ＳＢ45・48・49、ＳＫ46・52実測図
　　遺物実測図……14
第11図　ＳＢ35・36、ＳＤ34実測図……16
第12図　ＳＢ43、ＳＫ44実測図
　　遺物実測図……17
第13図　ＳＢ47・50・51実測図……18
第14図　遺物実測図……19
第15図　ＳＤ31・32・33実測図……20
第16図　ＳＤ27・28、ＳＢ28、ＳＫ29・30実測図
　　遺物実測図……21
第17図　ＳＫ37、ＳＢ38、ＳＸ53実測図
　　遺物実測図……22
第18図　ＳＸ12・13実測図
　　遺物実測図……23
第19図　遺物実測図……24
第20図　遺物実測図……25
第21図　遺物実測図……26

表 目 次

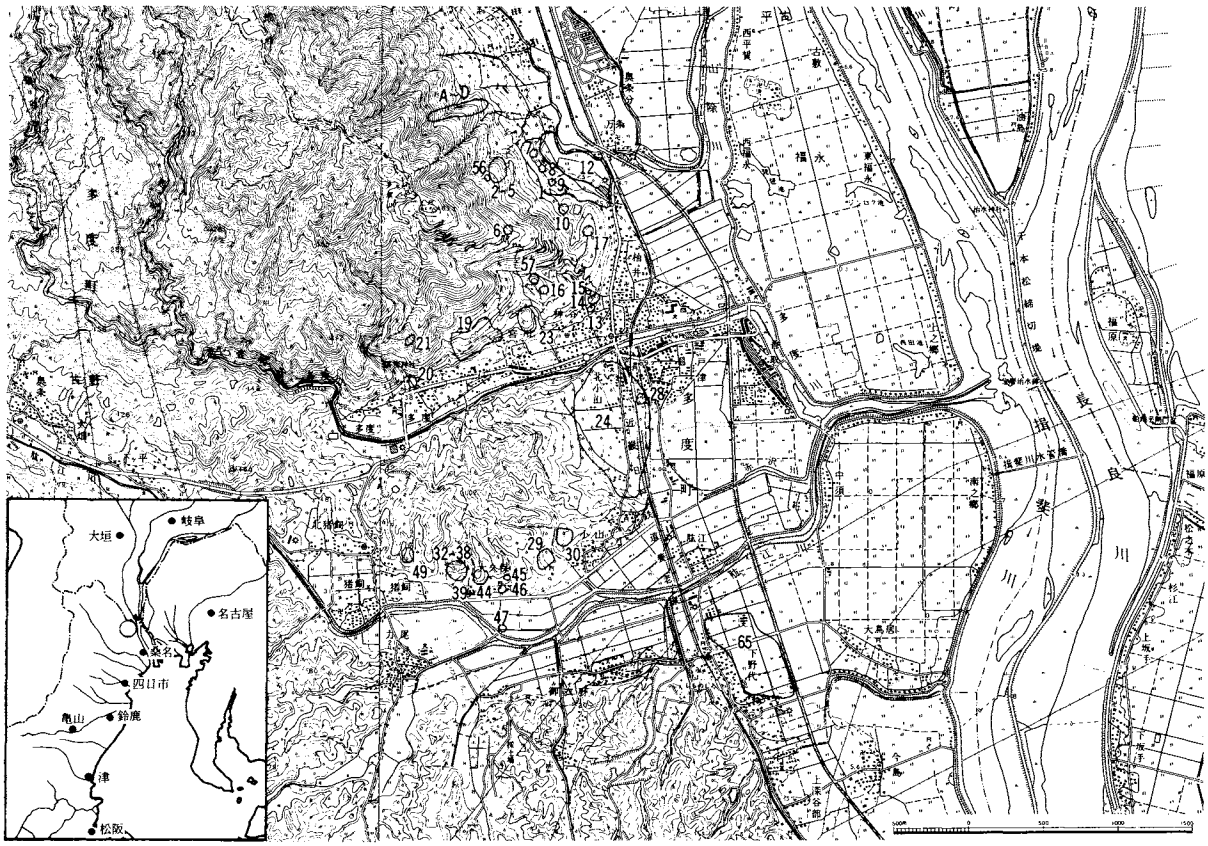
第１表　竪穴住居の規模……15
第２表　掘立柱建物の規模……15

Ⅰ 前　　言

天王平遺跡は昭和７年、多度小学校建設の際に奈良時代の土製馬が採集され、その後も地元の伊東春夫氏によって、精力的に遺物が採集され、遺跡の規模も次第に明らかになってきた。採集された遺物も縄文土器片をはじめ弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器など多彩で、遺物の採集出来る範囲は東西300ｍ、南北800ｍにおよぶ広大な遺跡であることが明らかになっている。遺跡は木曽三川を東に臨む丘陵上で、標高15ｍ～40ｍに亘る斜面に位置しており、北側は多度川に限られている。遺跡は全面開墾された蜜柑園、畑で、最近の宅地化がこの地に及び、次第に宅地が増えつづけている。

多度神社前から役場前を通る主要地方道四日市多度線は幅員僅か3.5ｍ～4.5ｍと狭く、近年の交通量の増大により、しばしば渋滞をおこしている。このため、現在の道路の南側に幅員12ｍのバイパスを建設することが県土木部によって計画された。多度小学校より小山に抜ける町道より西側は主要地方道四日市多度線として、これより東側、大桑道路までは桑名都市計画道路多度香取線として建設されることになった。この結果、遺跡は約5000㎡に亘って破壊されることになり、このうち、今回の調査対象範囲は約2900㎡である。

昭和55年９月、道路建設課より文化課を経由して文化庁へ、文化財保護法第57条に伴う事前通知が提出された。その後、文化課、道路建設課、桑名土木事務所の三者の間で何度も保存方法について協議がもたれた。保存については既に南側都市計画道路部分の大桑道路への取付部分は仕上がっており、計画変更も出来ず、発掘調査による記録保存という合意に達した。しかし、昭和55年度の文化課の発掘調査事業は既に予定が立っており、次年度に実施することになった。昭和56年度当初、文化課より県土木部に対し、発掘調査費用の負担を依頼するとともに現



第１図　遺跡位置図（1:50,000）国土地理院１／2.5万 阿下喜・弥富

地調査の準備に入った。

発掘調査は6月2日より9月12日まで、真夏の酷暑の中で実施した。このあと、ひきつづき都市計画道路部分の発掘調査を第2次調査として実施する予定であった。発掘調査の結果、多数の竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが検出された。多度町におけるはじめての本格的な発掘調査であった。発掘調査の終了した翌9月13日には地元の方々に対し、調査結果を説明する会をもったところ100余名の熱心な参加者があった。

発掘調査中は桑名土木事務所、多度町教育委員会、地元小山地区の方々には種々お世話になった。記して謝意を表する次第である。

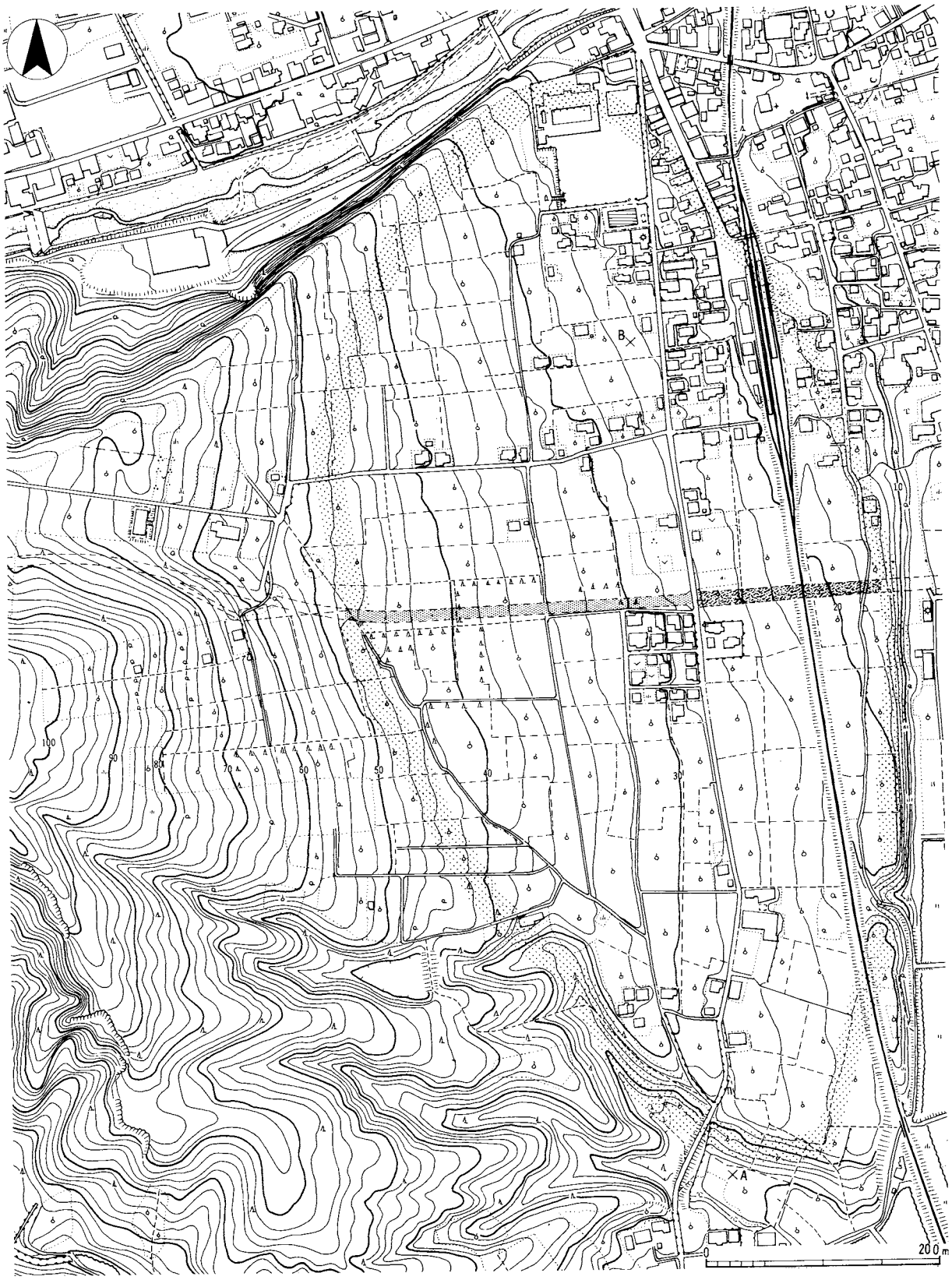
Ⅱ　位置と歴史的環境

多度町は三重県のほぼ北端に位置し、北に連なる養老山地と、東を流れる木曽三川が岐阜・愛知との界をなしている。養老山地は東にけわしく、西にゆるやかな傾動地塊であり、濃尾平野もまた西にゆくほど土地は低くなっている。このため三大河川は平野部に入るやいなや、ともに流路を大きく西にとり、からみ合いながら流れている。当然のことながら洪水の影響は、平野西部において最もひどいものであった。さらに洪水をもたらす雨は、養老断層に沿ってしばしば山崩れを伴ったのである。このように見ると養老山地の東縁～濃尾平野西部（輪中地帯）というのは、はなはだ不安定な、住むに不向きの土地柄であったことがわかる。

しばしばこの列島の文化は東西に分けてとらえられるが、三大河川の合流するこの地域もまさに東西を分かつ重要な地点のひとつであった。(方言上の親不知－桑名ラインはよく知られている)。このように三大河川は自然の障壁であったのである。それでも畿内より東国へ向う者が（水陸を問わず）通らねばならぬ要衝であることに変りはなかった。たとえば倭姫命が天照大神を奉戴して巡幸の折、四年間を過されたという野代宮は、同町下野代に坐す式内野志里神社付近に比定され、ヤマトタケルが東征の帰路「尾張に直に向へる尾津の前なる一つ松……」と詠まれたのはまさに尾津平（あるいはその傍の戸津の集落）の事と考えられ（式内尾津神社あり)、また同地に接する天王平の名の由来は、壬申の乱に際して大海人皇子の遷幸にちなむと伝えられている。個々の伝承の真偽はともかく、この地域が古代交通の要路に当っていたことは現在地図を展げて見るだけでも想像に難くない。

さて養老山地の南端には神奈備の山、すなわち標高403mの多度山が鎮まり、その南麓には旧桑名郡内唯一の式内名神大社である多度神社がひかえている。郡内唯一というよりも、神宮を除いた伊勢国で大社を与えられているのは、あと一志郡の阿射加神社があるばかりである。したがって歴史に現れる多度の町も、伊勢・美濃を結ぶ街道の宿場町としてよりも、この古社の門前町として知られたのである。しかし伊勢神宮に対して「北伊勢大神宮」とか、「伊勢に参らば多度をもかけよ、お多度参らにゃ片参り……」などという俗謡が流布するようになったのは、朝熊や多賀と同様伊勢にあやかったもので、伊勢参宮そのものが盛んとなった近世の産物であろう。この多度神社について少し記しておきたい。まず祭神であるが、天津彦根命といい、アマテラスとスサノオの天安河の誓約によって生まれた神である。しかし実際には別宮（摂社）一目連神社に祀られている彦根命の御子神天目一箇命（鍛治神）の霊威の方が畏怖せられ、多度の神といえばもっぱらこの神を指したと伝える。また社の裏山の岩に「巨人の足跡」なる窪みがあるそうで、これなどもダイダラボッチを彷彿とさせ、(一本ダタラ・一ツ目という回路を経て）そこにタタラを認めたい誘惑を抑えることができない。それにしても高名なわりに創祀の経緯などはっきりしない神社ではある。ただ倭姫命・ヤマトタケル・大海人皇子の故事に多度が何ら影を落していないことは、起源や性格を考えるとき注意しておいてよいと思う。

今回調査することになった天王平・尾津平遺跡(24)



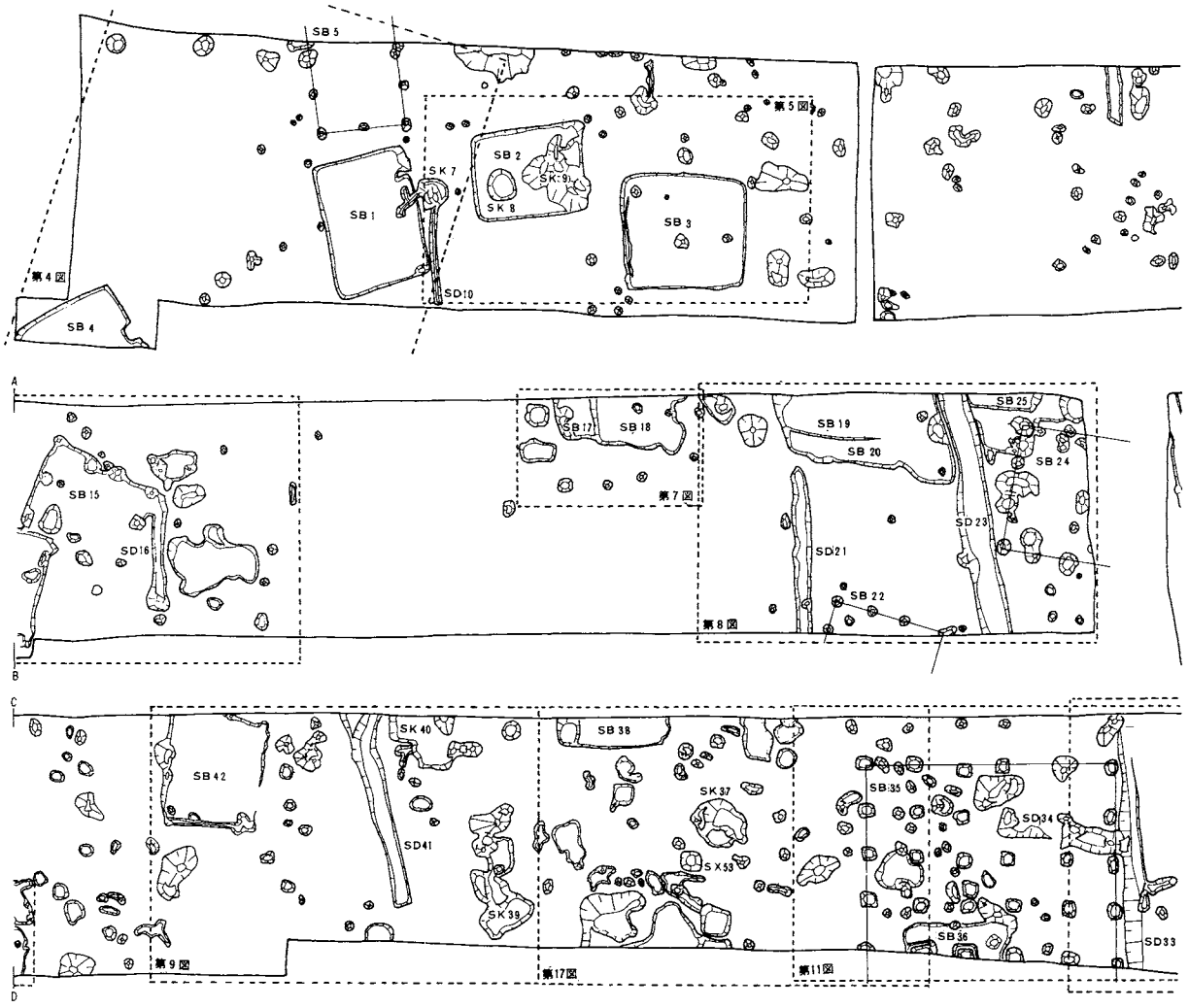
遺跡の範囲　　第一次調査区　　第二次調査区

A；水谷清太氏畑　　B；伊藤淳次郎氏駐車場

第2図　遺跡地形図（1：5000）

は多度山の南東約2kmの所にあり、養老山地の一支脈の東端に位置している。近年住宅も建ちはじめたとはいうものの、まだ大部分はミカンを主とし茶・柿・桑などの混じる畑地となっている。地図でわかるように非常にゆるやかで、「平」という名にふさわしい地形である。北は多度川に向って崖となり、東は「平」のつきるところ揖斐川の氾濫原に面して落差10m余の明瞭な段丘を形づくっている。いつの時代か揖斐川の本流がこの付近を流れており、この台地を浸蝕してできたものであろう。段丘の東50mばかりの所に舟着社という旧村社があるのも往古をしのばせる。これに対して南はややゆるやかに下り、小山の集落を経て肱江川へと至る。このように遺跡は、北南東を多度川・肱江川・揖斐川の氾濫原に区切られた丘陵地の、日当りのよい東斜面を全面覆うように位置しているのである。三面を区切られるとはいえ決して狭いものではなく、最大幅で見積って南北900m余・東西500m余の広大なものである。水の問題さえ解決できれば（あるいは単に、それら三川から水を運ぶ労さえいとわなければ)、まことに快適な生活環境であったろうと思われる。もっとも当時その付近の揖斐は鹹水で、飲用には適さなかったかも知れない。

次に同町のおもな遺跡について見ると、まず多度山東麓の古墳群が注目される。すなわち一ノ谷古墳群（2～10、17、56)、式内宇賀神社古墳群等（13～16，57)、そして隣接する岐阜県南濃町の狐平古墳群（4基）である。また南麓には鎌倉～室町時代にかけての愛宕山経塚(19)も確認されている。さらに上記三つの古墳群とは2km近く南に隔った場所にも大久保古墳群（32～47）がある。以上の中で宇賀神社1号墳(13)と横山古墳(17)は小規模ながら前方後円墳である。しかしほとんどの古墳がすでに全壊ないし半壊なのは残念なことである。

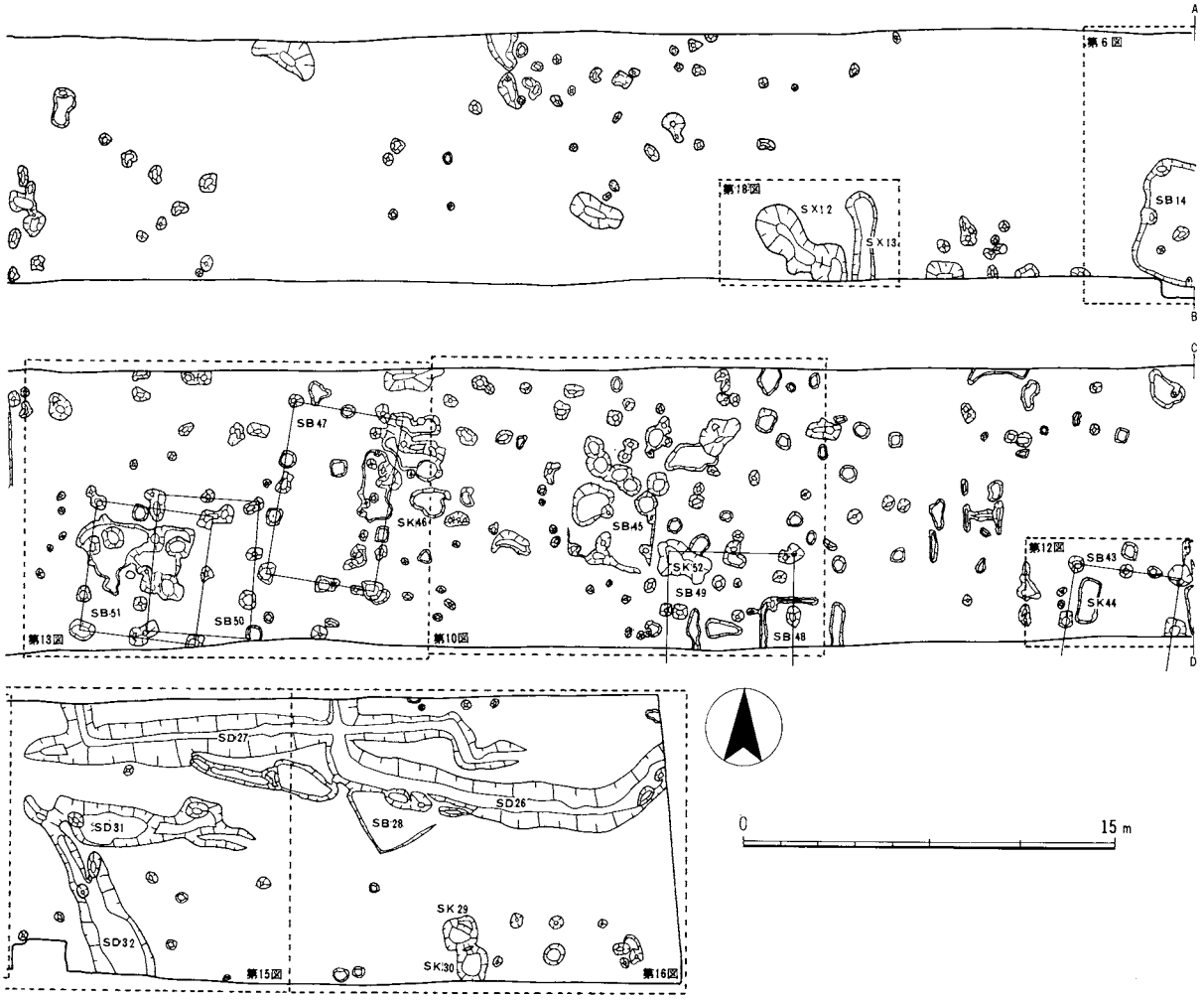


第3図　遺構平面・挿図配置図（1：300）

下って奈良時代にかけて、今の多度駅南付近に北小山廃寺(29)があった。いずれも詳しいことはわかっていない。やや遅れて多度神宮寺(20)が開かれる。延暦20年（801）同寺の『縁起資財帳』によれば天平宝字７年（763)、神社の東方で満願禅師が道場をいとなみ、丈六の阿弥陀仏など造りながら住んでいたところ、多度の神のお告げがあり「神身を離れ、三宝に帰依したい」といわれる。そこで禅師は神坐山の南辺に小堂を建て、御神像を祀って多度大菩薩と号せられたと伝える。少なくとも763年には神社は存在しているのである。同じく資財帳によれば、二基ある塔のうち瓦葺は西塔のみで、東塔も他の法堂（３棟）僧坊（４棟）大衆湯屋等（６棟）などすべて板葺・檜皮葺・草葺のいずれかとなっている。これは現在でもおびただしい瓦を認める南小山廃寺などとは著しく趣きを異にするわけで、それぞれの性格を考えるときやはり注意してよいことだと思う。

天王平に住みついた人々の暮しも、これらの寺院と時期を同じくしていとなまれていたのである。また江戸中期に至って、社の裏山の巨石の下から和鏡30面・経筒等を出土している（21)。いずれも平安期の作という。次に遺跡ではないが、すでに挙げた五社以外の式内社として、同町御衣野の佐乃富神社があり、中臣神社も本来香取にあったのではないかとする説もある。

遺物包含地としては、天王平・尾津平遺跡以外に広域なものが三ヶ所あり、同遺跡に先行する時期のものとしては一ノ谷Ａ遺跡（１．弥生以降）があるが、良好な資料は得られていないそうである。同時期のものとしては有名な柚井泥炭層遺跡（12．古墳～平安）がある。ただ木簡の中には「桜樹郷」と記されたものもあり、他の遺物の中にも上流から流れてきたものが含まれているに違いない。また地図を見てもわかるように、一ノ谷Ａ遺跡や同古墳群と隣



接しているわけで、むしろ包括してとらえなくてはならないと思う。次に後続する時期のものに下野代遺跡（65，平安～室町）がある。

以上のように遺物包含地（おそらくは集落跡）は、時代の流れにしたがって北から南へ大きく三地域に分けてとらえることができそうである。

(註)

（　）内数字は第１図の遺跡番号に相当する。

Ⅲ　遺構と遺物

１．竪　穴　住　居

ＳＢ１（第４図）

東西3.9m・南北3.4m・深さ25cmと、南北に長い方形のプランを持つ。周溝や柱穴は不明である。カマドは、東壁の北よりにあり、付近からは土師器甕片が多数出土した。そのうちの一つは口縁部を下にしてカマド内に置かれていた。その他遺物としては須恵器短頸壺が出土している。

なお、北東・北西両コーナーの外側にピットが検出された。位置からみて竪穴住居に伴うものと考えられる。両ピット間は4.2mである。

土師器甕（１～３）　いずれもカマド付近から出土したものである。平安時代初期の遺物と考えられる。(１)は口縁部の破片であるが、胴は長いものであろう。口径31.5cmで淡褐色である。口縁部は外反し、端部はやや上に引き上げられる。胴部外面には縦方向の刷毛目が施されている。(２)はよく外反する短かい口縁部とほぼ垂直の胴部からなる。口径22.7cmで淡褐色を呈する。口縁部は内、外面とも横ナデ、胴部の外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で調整されている。(３)は口径14.4cm。淡黄色をしたもので、口縁部はややたつ。胴部はまるみをおびる。口縁部は内、外面とも横ナデ、胴部は外面が縦、内面が横方向の刷毛目で調整されている。

須恵器短頸壺（４）　ごく短かくやや内弯する口縁部と、肩のはった高くない胴部とからなっている。口径4.1cm、胴部径8.9cm、器高6.6cm。底部は糸切りされ平らで厚い。高台はない。口縁部から肩部にかけて深緑色の自然釉がかかる。胴部は赤茶色である。

ＳＢ２（第５図）

ＳＢ１の東にあり、東西4.5m×南北3.6m、深さ20cmの方形プランである。周溝、柱穴はみられなかった。東壁の中央に焼土を検出した。土師器片、須恵器杯片が出土している。

須恵器杯（５～６）　口径14.5cm、器高3.1cmのもの(５)と、口径14.0cm、器高3.7cmのもの(６)ともにやや平たく浅い印象を受ける。いずれも胴部は底部から垂直的に立ちあがり、その境目は明瞭である。底部はヘラ切り未調整(６)か、ナデ調整されるが、雑でヘラ起こしのあとがよく残る(５)。また、５の底部内面には×印のヘラ描きが見られる。平安時代初期のものであろう。

ＳＢ３（第５図）

東西５m×南北4.6m、深さ15cmのほぼ方形をした住居である。ＳＢ２の東で検出したが、ＳＢ１、２とは方向をやや異にする。内部遺構としては西壁に周溝をもつ。柱穴は北西角に一ヶ所検出されたのみで、他は不明であった。出土遺物には、甑把手、土師器甕片、同皿等がある。

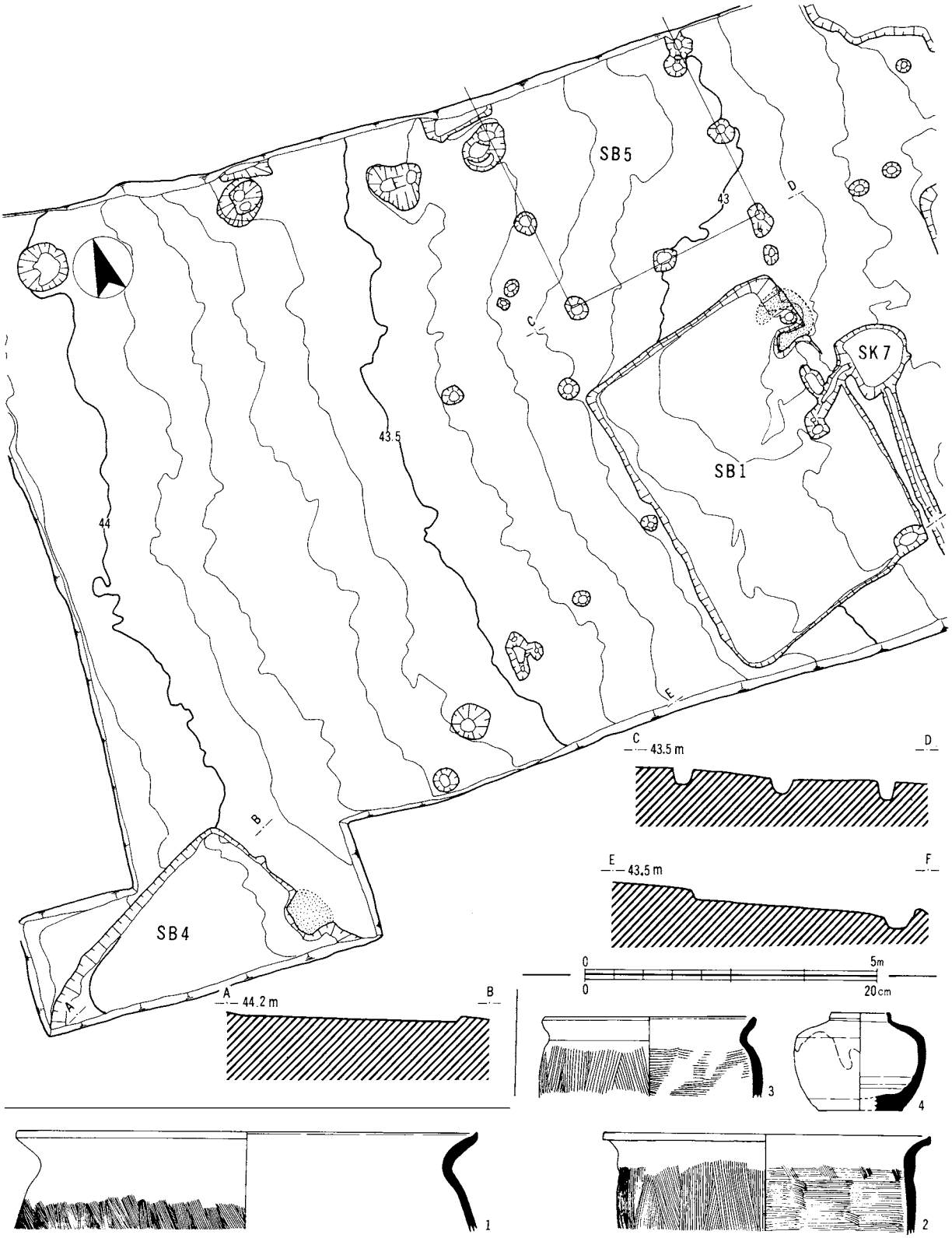
土師器甕（７）　口径28cmで灰褐色を呈する。口縁部は外反し、中ほどが厚くなったあと一時うすくなるが、端部に至って再び丸く肥厚する。胴部内外面に刷毛目が施される。

土師器皿（８）　口径16.6cm、高さ1.6cmと偏平なもので、明赤褐色をしている。口縁部は内弯しながらなだらかにたちあがり、端部には面をつくる。口縁部外面はヘラミガキ、他はナデによる調整がなされている。

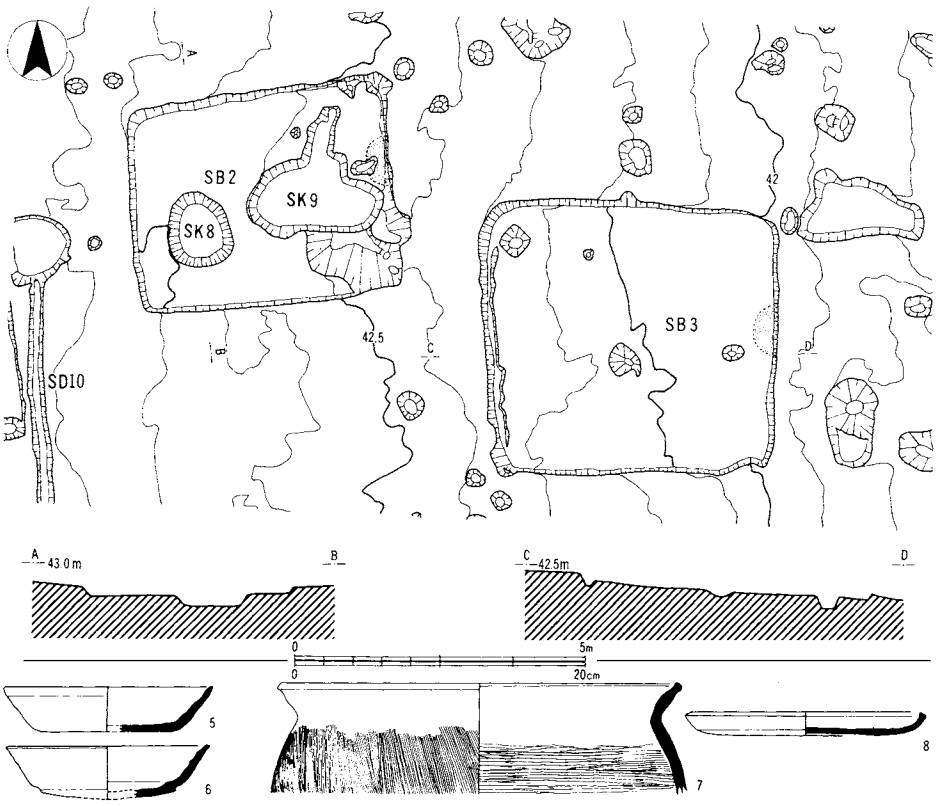
7、8ともに、SB1、2の出土遺物よりやや古く、奈良時代末～平安時代初期のものであろう。

SB4（第4図）

今回の調査区の中では、最も西、高所に位置する。½は調査区外になるため、南北の長さは不明である。東西4.4m、深さ30cmの方形である。東壁のほぼ中央にカマドをもつが、そのほかの内部遺構は不明であった。カマドからは土師器甕片が出土しているが、図化できなかった。平安時代初期の住居と思われる。



第4図　SB1・4・5、SK7実測図（1：100）
遺物実測図（1：4）1～4；SB1



第5図　ＳＢ２・３、ＳＫ８・９、ＳＤ10実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）５～６;ＳＢ２、７～８;ＳＢ３

ＳＢ14（第６図）

ＳＢ３より65ｍほど東にあり、ＳＢ15とは隣接する。東西3.3ｍ×南北4.8ｍ、深さ26cmのほぼ長方形のプランをもつ。周溝はみられず、柱穴は検出されなかった。東壁の南よりに焼土がみられた。出土遺物は比較的多く土師器の甕片、杯片・須恵器等があった。

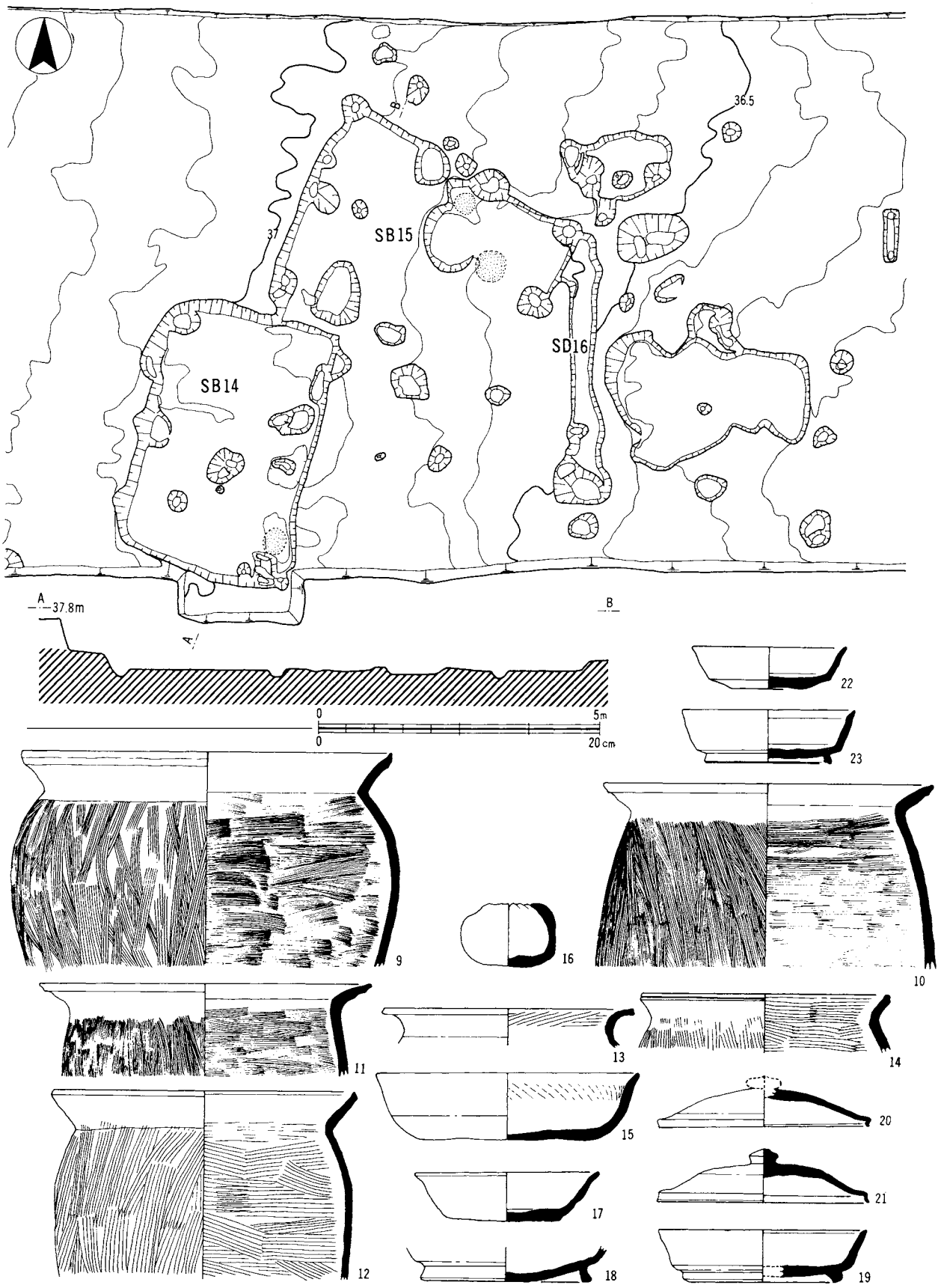
土師器甕（９～14）　いずれも口縁部の破片である。９～12は、口径22～25cmで、口縁部は外反する。長い胴部をもつものであろう。９は肩がよくはるが、肩部のほとんどないもの(11)もある。口縁端は、外に向かって引き出されたもの（10、11）と、上方あるいはやや内を向くもの（９、12）がある。調整方法は９～12とも口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は内外面とも刷毛目によるものである。13は、口縁部が著しく外反し、内面に刷毛目をもっている。口径18.2cmで、黄白色。胎土は粗い。14は、やや立ちぎみの口縁をもつ。胴部は丸いものであろう。口縁端部は丸くしあげられ、外側に一条の沈線がめぐる。口縁部外面がヨコナデで調整される以外は、やや粗めの刷毛目がみられる。口径17.6cm。淡褐色である。

土師器杯（15）　赤褐色で、口径19.0cm、器高4.6cmのものである。外面はヘラ磨きで、ていねいなつくりである。内面には、放射状の暗文がみられる。

土師器小形壺（16）　長径７cm・短径３cm・高さ５cm。手づくねによるものでほぼ完形。側面の一方を閉鎖口としている。黄褐色で焼き胎土とも良好である。

須恵器杯身（17～19）　17は高台をもたず、水平でヘラ切り未調整の底部から、はっきりとした境をなしてたちあがり口縁部はわずかに外反する。口径13.6～12.7cmとややいびつである。器高は3.5cmで、明るい褐色である。18、19はともに高台を有する。19は水平な底部から折れまがって直線的にたちあがり口縁に至る。口径15.0cm、器高３.７cm。18はゆがんだ底部の破片であるが、高台は19より細くハの字型につく。

須恵器杯蓋（20～21）　20はつまみを欠くが、口径15.0cmのもので口縁部は内を向いて折れまがる。21は、口径15.0cm、器高３.８cmで、口縁端部は外を向く。20、21とも天井部外面はヘラケズリで調整されている。



第6図　ＳＢ14・15、ＳＤ16実測図（１：100）

遺物実測図（１：４）９～21;ＳＢ14、22～23;ＳＢ15

ＳＢ15（第６図）

ＳＢ14のすぐ北側に接する。重複関係は不明確であったが、ＳＢ15の方がより古いものであろうか。規模は、東西4.7m×南北3.7m、深さは約20cmだが、南と東へいくに従って浅くなり、南壁と東壁ははっきりしない。周溝はみられない。柱間は東西 4.7m×南北 3.7mである。東壁中央のやや内側よりに焼土が検出された。出土遺物には、須恵器杯のほかに土師器甕片があったが、量的にはＳＢ14よりやや少ない。

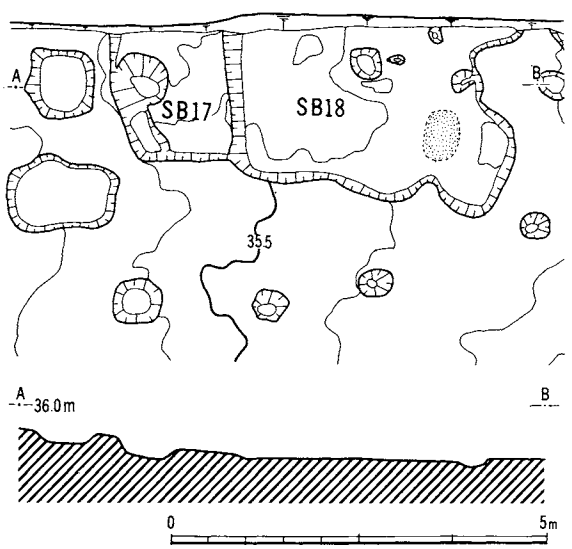
須恵器杯（22・23）　高台をもつもの(23)と、もたないもの(22)がある。22は比較的厚い底部と外反する口縁部とからなる。表面は磨滅し調整方法は明らかでないが、底部から折れまがって直線的にたちあがる口縁をもつ。口径12.4cm・器高 3.7cmで灰色である。

ＳＢ17・18（第７図）

ＳＢ15の東約20mにある。ＳＢ17の上にＳＢ18が重なっており、重複関係からみると、ＳＢ17よりＳＢ18の方が新しい。ＳＢ17は、深さ10cmという以外、規模や内部遺構は不明であった。ＳＢ18は、東西3.1m、深さ23cmで、南東角に焼土が検出された。出土遺物は、土師器の甕・杯の破片、須恵器片があったが、図化できるものはなかった。

ＳＢ19・20（第８図）

ＳＢ17・18のすぐ東にある。ＳＢ20の上にＳＢ19が重なっており、重複関係からはＳＢ20の方が古い



第７図　ＳＢ17・18実測図（１：100）

と考えられる。半分以上が発掘区外にかかるため、南北の長さは不明だが、ＳＢ19が、東西辺 4.6m、深さ40cm、ＳＢ20が、4.4m、20cmである。内部遺構としては、ＳＢ20の東壁南よりに焼土を、またＳＢ19の南東隅にカマドを検出した。出土遺物は、土師器の甕、杯、須恵器の杯身蓋、甕、灰釉椀等があるが、ＳＢ19のものか、ＳＢ20のものかの判断はつけられなかった。

土師器甕（24～25）　24はカマド付近から出土したもので、口径22.0cm。黄褐色をしている。口縁部はよく外反し、胴部は丸みをおびる。胎土は粗く、長石や金雲母などを含む。口縁部の内面と胴部の外面にはひじょうに粗い刷毛目が施されている。24は口径15cmと小型のもので、赤褐色である。口縁部は外反し、端部は上方に引きあげられる。胴部外面に刷毛目がみられるが、そのほかは磨滅がはげしい。

土師器椀（26）　ほぼ水平な底部からなだらかにたちあがり口縁に至る。口縁端部は内側で段をなして、うすくなる。口径16.7cm、器高約 4.3cmで赤茶色をしている。胎土は緻密であるが、表面は磨滅し、暗文などは不明である。外面はヘラミガキ調整と思われる。

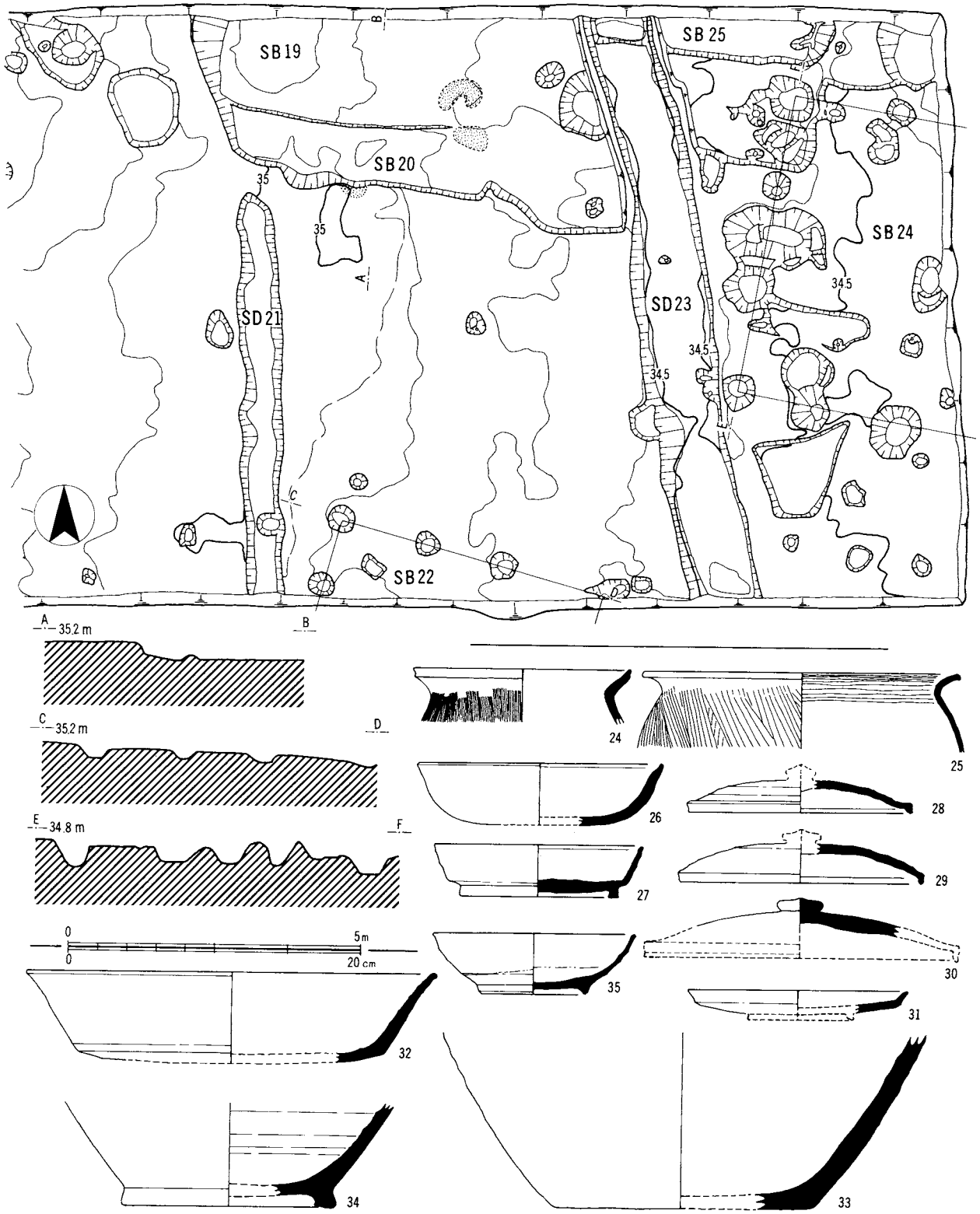
須恵器杯身（27）　口径14.2cm、器高 3.5cmで青灰色をしている。高台をもつ。厚い底部と、うすくやや内弯しながら立ちあがる口縁部とからなる。その境は明瞭で、境のやや内側には断面四角形のしっかりとした高台がつく。底部外面は中央部に糸切り痕をのこすほかはヘラケズリ、そのほかの部分はロクロナデによって調整されている。

須恵器杯蓋（28～30）　28と29はよく似たものでいずれもカマド付近より出土した。口径は、15.0cmと16.8cm。推定高はともに 3.5cmである。口縁端部はまっすぐ下を向く。調整方法は、天井部外面の中央よりがヘラケズリ、ほかはロクロナデによるものである。30は天井部の一部だが、28、29より大型である。つまみは、径が大きく低い。天井部外面はヘラケズリによって調整されている。

須恵器皿（31）　口縁部の破片で、推定口径15cm。底部から明瞭に折れて立ちあがり、口縁端部はやや外反する。底部外面はヘラケズリによって調整されている。

須恵器盤（32）　青灰色で、推定口径14.1cm、器高6.3cm。やや丸味をおびる底部と、直線的に立ちあがり、口縁部に至って外反する体部とからなる。口縁端部はまるくつくられている。底部外面と体部下方はヘラケズリによってていねいに調整されており、底部と体部の境は、はっきりとした稜をつくる。

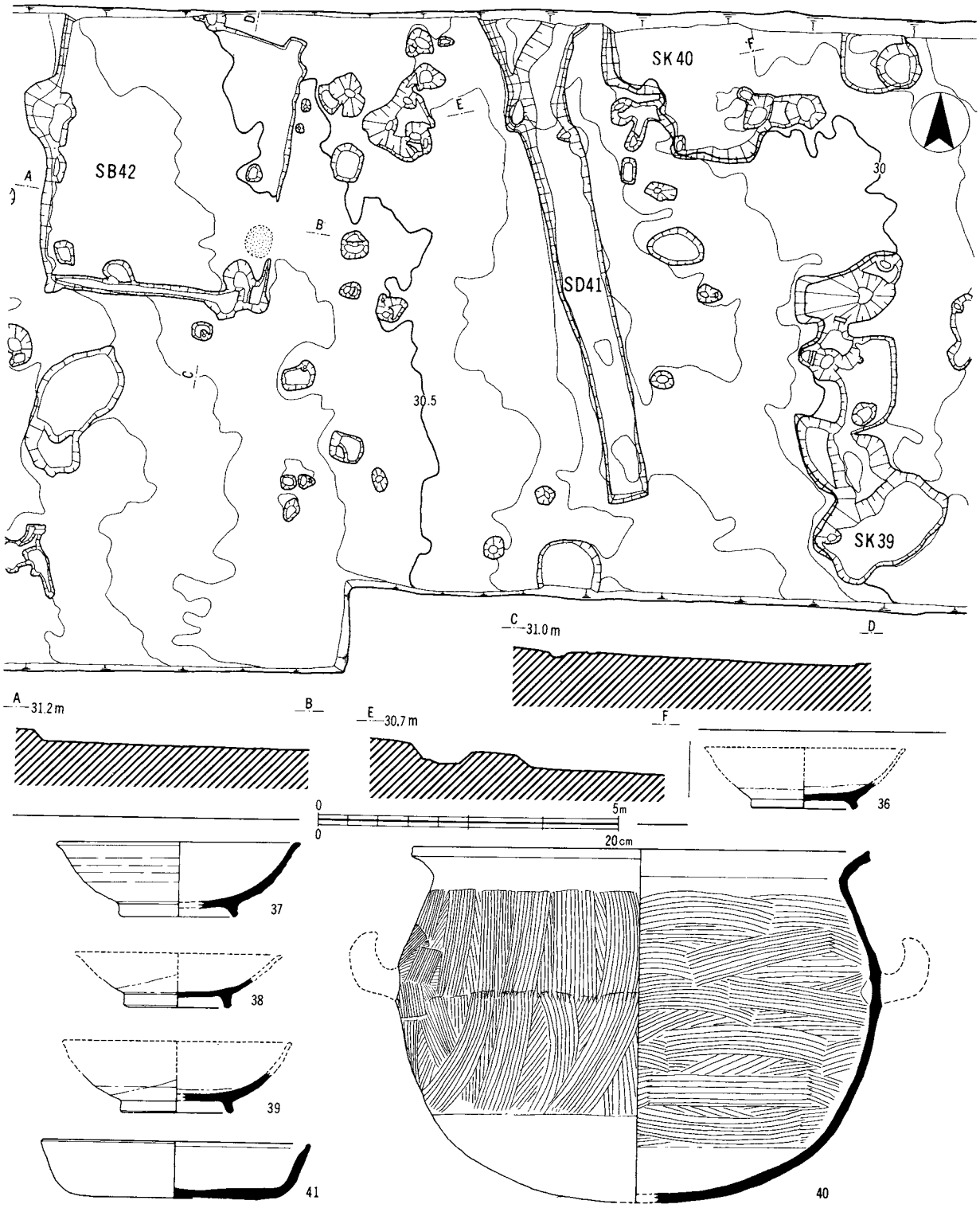
須恵器甕（33）　大型の甕の底部である。底部の径18.0cm。焼成はあまりよくない。底部は平らで、明瞭な稜をなして胴部が立ちあがる。胴の下部には指の押え痕がのこる。



第8図　ＳＢ19･20･22･24･25、ＳＤ21･23実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）24～33;ＳＢ19･20

灰釉広口壺（34）　底部の破片だが、広口瓶と推定される。暗灰色で、高台径14.6cmである。水平な底部から直線的に胴部が立ちあがり、その境目に断面四角形のしっかりとした高台がつく。外面はきれいにヘラケズリされ、内面には濃い灰釉がかかっている。

灰釉椀（35）　口径14.0cm、器高4.1cm、灰白色である。内外面ともに、ハケヌリと思われる灰釉がかかっている。特に口縁部から内面にかけて濃い。口縁部はよく内弯している。一部にゆがみがあり、輪花椀を思わせる。底部はヘラケズリされ、真円でしっかりとした高台がつく。



第9図　ＳＫ39･40、ＳＤ41、ＳＢ42実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）36;ＳＫ39、37;ＳＫ40、38～39;ＳＤ41、40～41;ＳＢ42

ＳＢ25（第８図）

ＳＢ19・20からＳＤ23を隔てた東にある。発掘区の北端で、竪穴住居の南辺部のみを検出した。西方はＳＤ23によって切られている。

ＳＢ28（第16図）

今回の調査区の東端から西へ約10ｍのところで検出した。ＳＤ26によって北東部を切られている。規模は、東西4.2ｍ×南北2.9ｍで、深さ15㎝である。内部遺構は不明だが、ＳＤ26の北側にある焼土はＳＢ28に伴うものであろう。出土遺物はなかった。

ＳＢ36（第11図）

ＳＢ35（掘立柱建物）の内部、南よりにあり、竪穴住居の南側半分は発掘区外となった。ＳＢ35の柱穴のうち２つがＳＢ36の上につくられており、重複関係からはＳＢ36の方が古い。規模は東西4.1ｍで、深さ20㎝。内部遺構は不明であった。

SB38（第17図）

S.B35の西約10ｍのところで検出した。東西4.5ｍ、深さ18㎝で南側半分は調査区外となる。内部遺構などは明らかでない。出土遺物もなかった。

ＳＢ42（第９図）

ＳＢ38の西約12ｍのところで検出した。規模は東西3.9ｍ×南北4.6ｍ、深さ20㎝である。南辺に周溝をもつ。また、東壁の南よりにカマドをつくっている。土師器の鍋、杯が出土している。奈良時代末頃の住居である。

土師器鍋（40）　口径30.5㎝、胴部径32.5㎝、器高23.5㎝で、黄褐色である。全体に器壁は薄く、把手を欠く。底部は内面をランナデ、外面は斜め方向のヘラケズリで調整される。胴部は内外面とも、縦方向の刷毛目がみられる。口縁部は外反し、口縁端部は上に引きあげられる。ヨコナデによって調整されている。口縁部は、胴部に比べて器壁が厚い。

土師器杯身（41）　口径10.0㎝、器高3.7㎝。赤褐色で、胎土はひじょうに精良である。底部は平らにヘラケズリされ、口縁部が直線的に立ちあがる。口縁端部は一段薄くなる。外面はヘラミガキ、内面はナデによって調整される。

ＳＢ45（第10図）

ＳＢ42の西約30ｍのところで検出した。土坑やピットが切り込んでいるため、北壁や西壁は明らかでない。規模は東西3.4ｍ×南北2.9ｍとやや小さめである。内部構造は明らかでなかった。土師器甕、須恵器杯身、同蓋などが出土しており、平安時代初期の住居跡と考えられる。

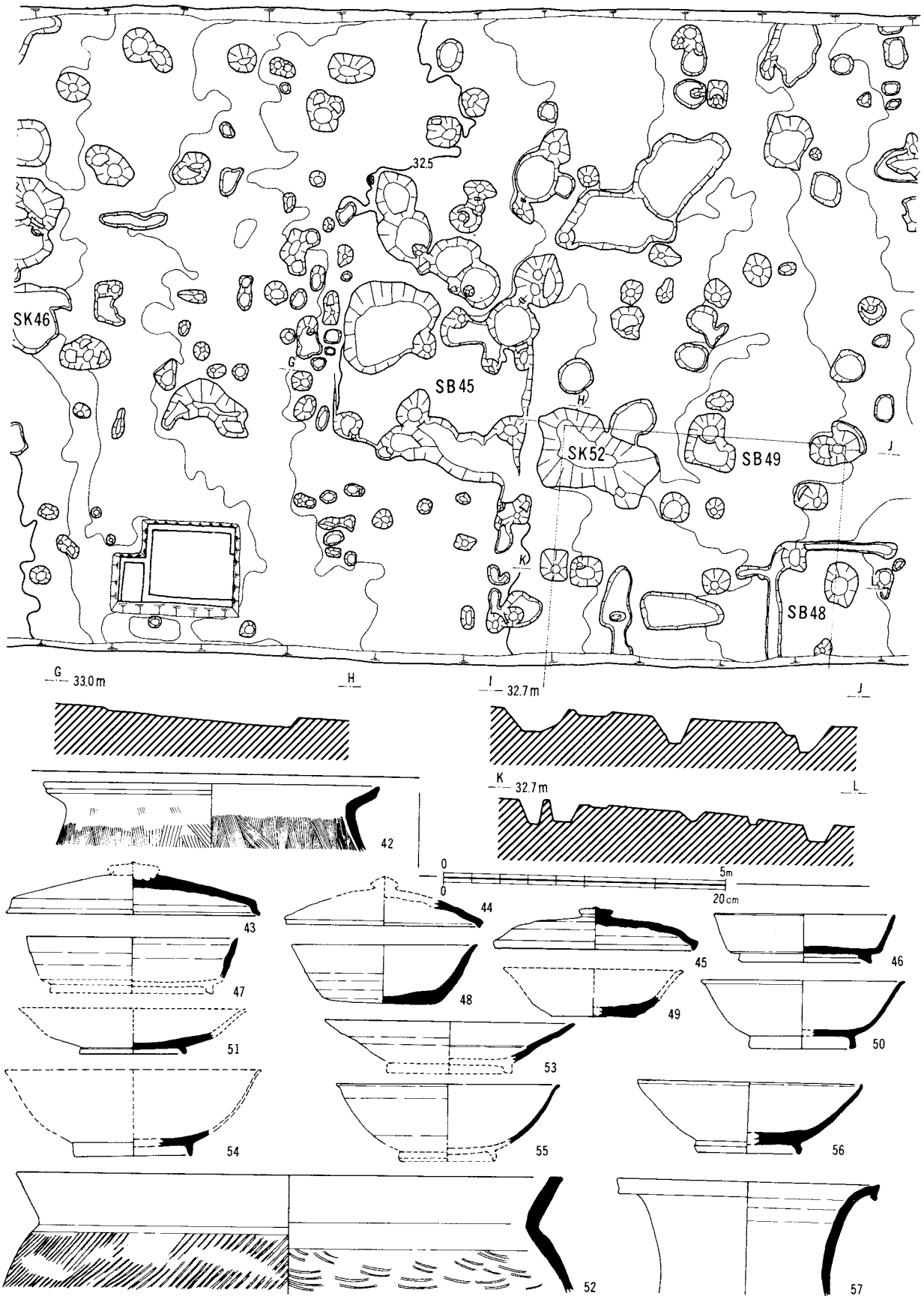
土師器甕（42）　口縁部¼の破片である。口径24㎝で灰褐色をしている。胴部から口縁部に向かってくの字に折れまがり、口縁端部は下を向く。調整は、胴部が内、外面とも縦方向の刷毛目、口縁部はナデによるものである。

須恵器杯蓋（43～45）　43は宝珠つまみ部を含む、½の破片である。灰褐色で、こんもりとした感じを受ける。口径14.1㎝、器高3.1㎝。天井部外面の中央部分はヘラケズリ、そのほかの部分はロクロナデによる調整がなされている。口縁は、端部に至るまで、まっすぐ下を向く。44は⅙の破片で黄灰色をしている。天井部はやや弯曲する。口縁部と天井部の境目は外に引き出されている。45も⅙の破片であるが、焼成が十分でなく淡橙色をしている。天井部は少し弯曲するが、44ほどではない。口縁部は天井部と明瞭な境をなして折れ曲がるが、端部は外反している。調整方法は、天井部外面の中央部からヘラケズリ、口縁部や天井部内面はロクロナデによるものである。

須恵器杯身（46～47）　46は幅の広い付高台を有する。口径13.0㎝器高3.4㎝のものでほぼ完形である。色は淡紫色をしている。底部は水平で、するどく折れまがって立ちあがる。口縁端部に至るまで直線的である。底部外面は、中央部に糸切り痕を残すが、ほかはヘラケズリされる。口縁部の内、外面、及び底部内面はロクロナデによる調整である。45は口縁部の一部で、端部に至るまで直線的である。ロクロナデによって調整されている。推定口径16.8㎝で、暗褐色をしている。

ＳＢ48（第10図）

ＳＢ45の南東約６ｍのところで検出した。東西2.5ｍ、南北もほぼ同規模であろう。北辺と南辺に周溝



第10図 ＳＢ45・48・49、ＳＫ46・52実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）42～47;ＳＢ45、48;ＳＫ46、49～52;ＳＢ49、53～57;ＳＫ52

名称（SB）	規模（m）		深さ（cm）	南北軸	備考（カマド・焼土・周溝）
	東西	南北			
1	3.9	5.4	25	N12° W	カマド（北東）
2	4.5	3.6	20	N 5° W	カマド（東）
3	5.0	4.6	15	N 2° E	カマド（東） 周溝
4	4.4	—	30	N31° W	カマド（東）
14	3.3	4.8	26	N12° E	カマド（南東）
15	4.7	3.7	20	N27° E	焼土二ヶ所（東・北）
17	—	—	10	N 2° W	――――
18	3.1	—	23	N 3° W	カマド（南東）
19	4.6	—	40	N 7° E	カマド（南東）
20	4.4	—	20	N 9° E	カマド（南東）
25	—	—	27	――――	――――
28	4.2	2.9	15	N28° W	カマド（北東）
36	4.1	—	20	N 2° W	――――
38	4.5	—	18	0°	――――
42	3.9	4.6	20	N 8° W	カマド（南東） 周溝
45	3.4	2.9	7	N 6° E	な し
48	2.5	—	7	N 3° E	―――― 周溝

— 不明

第1表 竪穴住居の規模

名称（SB）	規模（間）	桁行（m）	梁行（m）	棟方向	柱間（m）		備考
					桁行	梁行	
5	—×2	——	3.6	N 7° W	1.6	1.8	
22	3×—	——	——	N74° W	1.5	1.2	
24	3×—	5.1	——	N13° E	1.7	1.5	
35	5×4	10.0	8.0	N87° W	2.0	2.0	総柱
43	—×2	——	4.3	N11° E	2.2	2.2	
47	3×2	7.1	4.5	N10° E	2.3	2.2	
49	3×2	5.3	4.2	N 5° E	1.8	2.1	
50	3×2	5.2	4.5	N 9° E	(1.9 1.4)	2.3	
51	—×2	——	5.0	N 3° E	2.5	2.5	

— 不明

第2表 掘立柱建物の規模

がめぐる。また、ＳＢ49（掘立柱建物）の柱穴がＳＢ48の床面にかかっているが、時代の前後関係は明らかでなかった。

2．掘立柱建物

ＳＢ５（第４図）

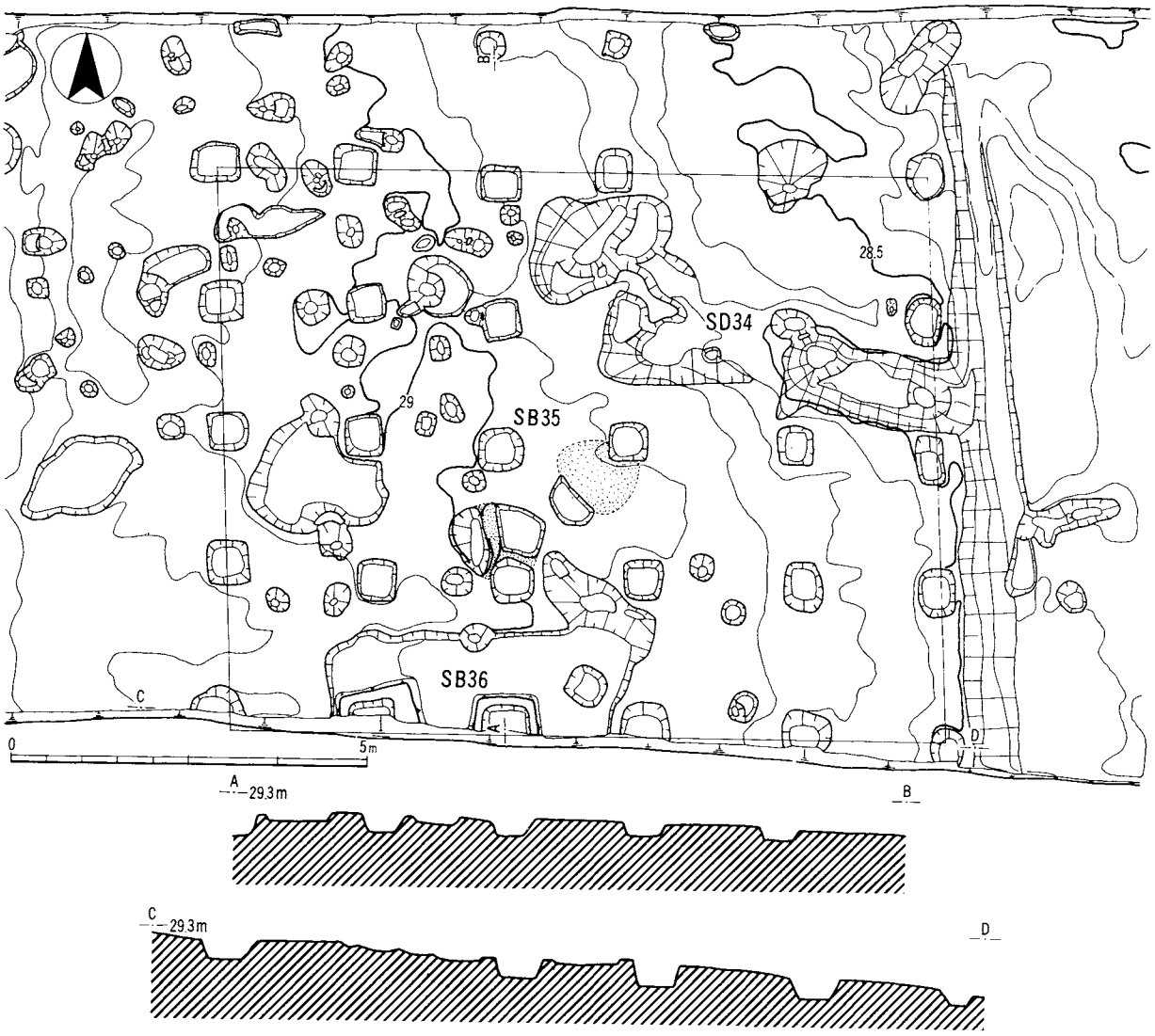
調査区の西端部分竪穴住居ＳＢ１のすぐ北側で検出された。棟方向はほぼ南北で、梁行２間・柱間1.8ｍ、桁行２間以上柱間1.6ｍの規模をもつ。柱掘り方は円形で直径30㎝前後、深さ25～30㎝。出土遺物はないため時期は不明であるが、平安時代後半のものであろう。

ＳＢ22（第８図）

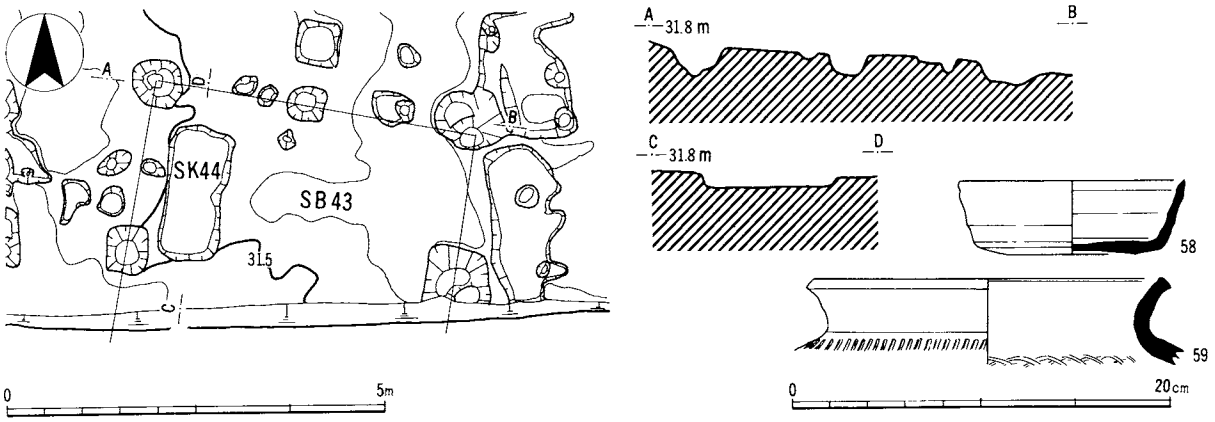
竪穴住居ＳＢ19・20の南で、掘立柱建物の北東角のみを検出した。桁行は３間である。棟方向はほぼ東西と考えられる。柱間は梁で1.2ｍ、桁で1.5ｍである。柱掘り方は円形で、直径約40㎝、深さ15～20㎝ほどである。

ＳＢ24（第８・14図）

ＳＢ19・20（竪穴住居）から溝（ＳＤ23）を隔てた東にあり、西辺及び南辺を検出した。３間×２間の南北棟と考えると、柱間は桁で1.7ｍ、梁で1.5ｍになる。柱掘り方は円形で、直径は50～80㎝



第11図　ＳＢ35・36、ＳＤ34実測図（１：100）



第12図　ＳＢ43、ＳＫ44実測図(１：100)
遺物実測図(１：４)58;ＳＫ44、59;ＳＢ43

とＳＢ５やＳＢ22に比べて大きい。深さは30～40cmである。出土遺物は南東隅の柱穴から土師器片が少量出土している。

土師器甕（60）　口径22.8cm。よく外反する口縁部の破片で、赤褐色を呈する。口縁端部は面をなす。口縁部外面はヨコナデ、ほかは刷毛によって調整される。胴部内面の刷毛目は特に細かい。平安時代初期のものと考えられる。

ＳＢ35（第11図）

今回の調査区内では最も大きな規模をもつ掘立柱建物で、５間（以上）×４間の総柱建物である。棟方向は東西で、柱間は梁・桁ともに２ｍである。柱掘り方は正方形ないし方形で一辺は60cm、深さ20～30cmである。出土遺物としては、須恵器の大甕片、杯・蓋片、土師器甕片があるが、図化できるものはなかった。なお、明らかな総柱建物は、これ一棟であった。

ＳＢ43（第12図）

ＳＢ42（竪穴住居）の南西にあり、？×２間。南北棟の北半分を検出した。柱間は、梁で2.15ｍ、桁で2.2ｍ。柱掘り方は一辺50～60cmの方形で、深さ30～40cmである。出土遺物には、須恵器甕片、杯、蓋等があった。

須恵器甕（59）　口縁部の破片である。口径は推定19.4cmで暗褐色をしている。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。口縁部は内、外面ともロクロナデにて調整されている。胴部は外面が縦方向のタタキ、内面は円形のタタキが施されている。

ＳＢ47（第13図）

ＳＢ45（竪穴住居）の西にあり、ＳＢ50（掘立柱建物）と隣接する。３間×２間のほぼ南北棟で、柱間は桁で2.3ｍ、梁で2.2ｍである。柱掘り方は一辺40～60cmの方形で、深さは40cm程度、棟方向、規模ともＳＢ43と近似する。遺物は、須恵器杯片、宝珠つまみ、土師器甕片が出土したが、図化できるものはなかった。また、この掘立柱建物は、総柱であった可能性もある。

ＳＢ49（第10図）

ＳＢ45（竪穴住居）のすぐ東側にある。梁行２間の南北棟と考えられるが、南半分は発掘区外となる。柱間は、桁・梁ともに2.5ｍ。柱掘り方は、不明瞭なものもあるが、一辺50～60cmの方形で、深さは40cmである。須恵器大甕片、灰釉椀等、平安時代後期の遺物が出土した。

須恵器大甕（52）　口縁部の一部で灰色をしている。推定口径39.2cm。口縁部は直線的にたちあがっており、端部は水平な面をもつ。ロクロナデによって調整されている。胴部はやや丸味を帯びており、外面には斜めの、内面には同心円と思われるタタキ目をもつ。くびれ部はややうすくなっている。

灰釉椀（50）　口径15.2cm、器高4.8cmのもので黄灰色をしている。高台は高さ0.9cmで、内弯し、しっかりとしている。底部は水平で、内弯しながらたちあがり、口縁端部に至ってわずかに外反する。全体に歪みなくよく調整されている。灰釉は内、外面全体にかかる。

灰釉皿（51）　底部の⅓片で灰色である。高台は

径7.6cm、高さ0.4cmで小さい。底部から体部にかけては直線的である。内面に灰釉がかかっている。

ＳＢ50（第13図）

ＳＢ47（掘立柱建物）のすぐ西側に隣接しており、ＳＢ51（同）とは重なり合っている。南北に棟を向ける、３間×２間の建物跡である。柱間は、桁で1.8ｍ、梁で2.05ｍである。柱掘り方は直径50cm前後の円形、または同規模の方形である。深さは30cm～50cm。土師器片等が出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＢ51（第13図）

ＳＢ50の西にあり、東半分をＳＢ50と重複させる。３間×２間の南北棟で、棟方向はすぐ東のＳＢ47(掘立柱建物）とよく似ている。柱間は、桁では1.75ｍ、梁では2.25ｍ。柱掘り方は一定ではないが、一辺50～60cm、深さ20～40cmの方形であろうか。須恵器杯・蓋片などが出土しているが、図化できなかった。ＳＢ50との時期差は不明だが、さほど差はないものと思われる。

第13図　ＳＢ47・50・51実測図（１：100）

3．溝・土坑等

ＳＤ10（第５図）

ＳＢ１（竪穴住居）の東側にある。南北方向の溝である。ＳＢ１とは向きが異なり、出土遺物の時期もちがうため、ＳＢ１に伴うものではない。現存長４ｍ、幅25cm～30cm、深さ10cmである。

ＳＤ16（第６図）

ＳＢ15（竪穴住居）の東方にある。南北方向にのびる溝で、長さ４ｍ、幅50cm前後、深さ10cmである。出土遺物はなかった。

ＳＤ21（第８図）

ＳＢ19・20（竪穴住居）の南にあり、これも南北方向の溝である。長さ７ｍ、幅60cm～70cm、深さ10cmである。

ＳＤ23（第８・14図）

ＳＢ19・20・25（竪穴住居）、ＳＢ22・24（掘立柱建物）の間をぬってほぼ南北にはしる。北方ではＳＢ25を切る。ただし方向は、どの建物跡とも一致しない。幅１ｍ～1.2ｍ、深さ25cmで発掘区を横切っている。遺物は比較的多く、灰釉椀、山茶椀、土師器片等が出土している。平安時代後期の溝である。

須恵器杯身（61）　底部の破片で、高台を伴うものである。水平な底部に付けられた高台は、外方に張り出す。底部外面はヘラケズリによって調整されている。

灰釉椀（62）　口縁部の破片である。器壁は薄く、内弯している。釉はつけがけによるものである。外面下部はヘラケズリ、ほかはロクロナデによって調整されている。

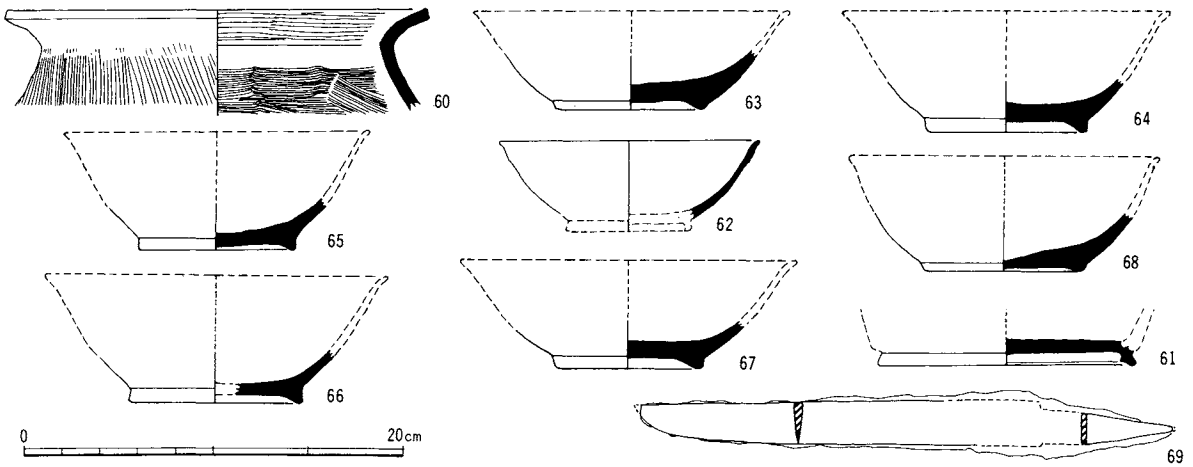
山茶椀（63～68）　いずれも底部の破片である。どれもよく似たものである。高台は大きめだが、つけ方は雑である。底部は厚く、外面には糸切り痕がよく残っている。63をのぞき、内面に自然釉がかかっている。

刀子（69）68とともに出土した。現存長28.2cm、刃長21.5cm、幅2.4cmで、鋒先部に向ってゆるやかに細くなる。鋒先部を少し欠く。柄部は銹ぶくれが著しい。

ＳＤ26（第16図）

今回の調査区の最東から、ほぼ西に向かい、約13ｍのところで北に曲がりＳＤ27と交叉する。大きくしっかりとした溝で、幅１ｍ～1.5ｍ、深さ30cmである。遺物は、灰釉皿のほか、土師器甕片などが出土している。

灰釉皿（70）　口径14.2cm、器高2.9cmで灰白色をしている。口縁はわずかに内弯しながらたちあがり、端部は外に向かって引き出される。高台は、内側を向いており、しっかりととりつけられている。ただし、比較的小さい。釉は内面だけにみられ、刷



第14図　遺物実測図（１：４）60; ＳＢ24、61～69; ＳＤ23

毛ぬりである。内外面ともロクロナデによりていねいにつくられている。

ＳＤ27（第16図）

ＳＤ26の北側にあり、ＳＤ26と同様、東西方向の溝で、ＳＤ26と交叉後約13ｍで北に曲がる。幅１ｍ～1.5ｍ、深さ25㎝である。ＳＤ26との切り合い関係は不明であった。出土遺物は、砥石のほか、少量の土師器片がみられるのみであった。

砥石（71）　泥岩質で、現長6.8㎝。右側は欠損している。四面とも使用痕がみとめられる。

ＳＤ31（第15図）

ＳＤ27の南にある東西溝で、長さ４ｍ、幅1.5ｍ、深さ15㎝である。また西方では、ＳＤ32を切る。出土遺物はなかった。

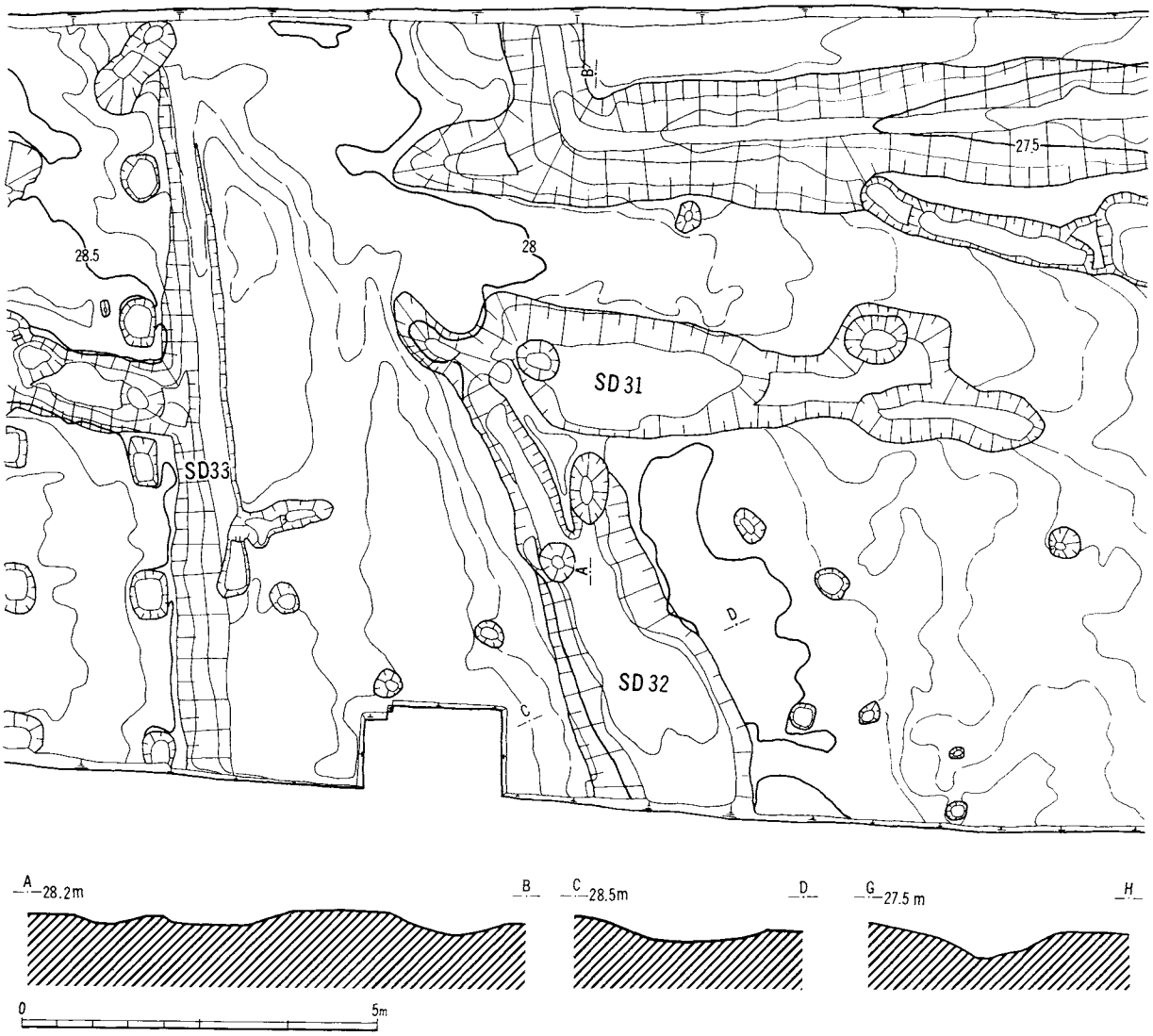
ＳＤ32（第15図）

ＳＤ31の南にあり、ほぼ南東―北西方向の溝である。現存長7.5ｍ、幅1.5ｍ、深さ30㎝である。須恵器杯身のほか、須恵器大甕片、杯蓋片が出土している。平安時代初期の溝である。

須恵器杯身（72）　口径８㎝、器高３㎝。高台はもたず、底部には糸切り痕がのこる。口縁は内弯しながらたちあがる。器壁はしだいにうすくなる。

ＳＤ33・34（第11図）

ＳＤ33は、ＳＢ35（掘立柱建物）の東側に添うよ



第15図　ＳＤ31・32・33実測図（１：100）

うにはしる南北溝である。溝の東側は不明瞭なところが多い。幅80cmで発掘区を横断している。深さは西壁付近で35cmである。ＳＤ34は、ＳＤ33のほぼ中央から、西に向かってのびる。長さ2.5ｍ、幅90cm、深さ25cmである。ＳＤ33との切り合いは不明であった。ＳＤ33・34合わせて、出土遺物は灰釉椀片等少量で、時期的には、ＳＢ35より新しいようである。

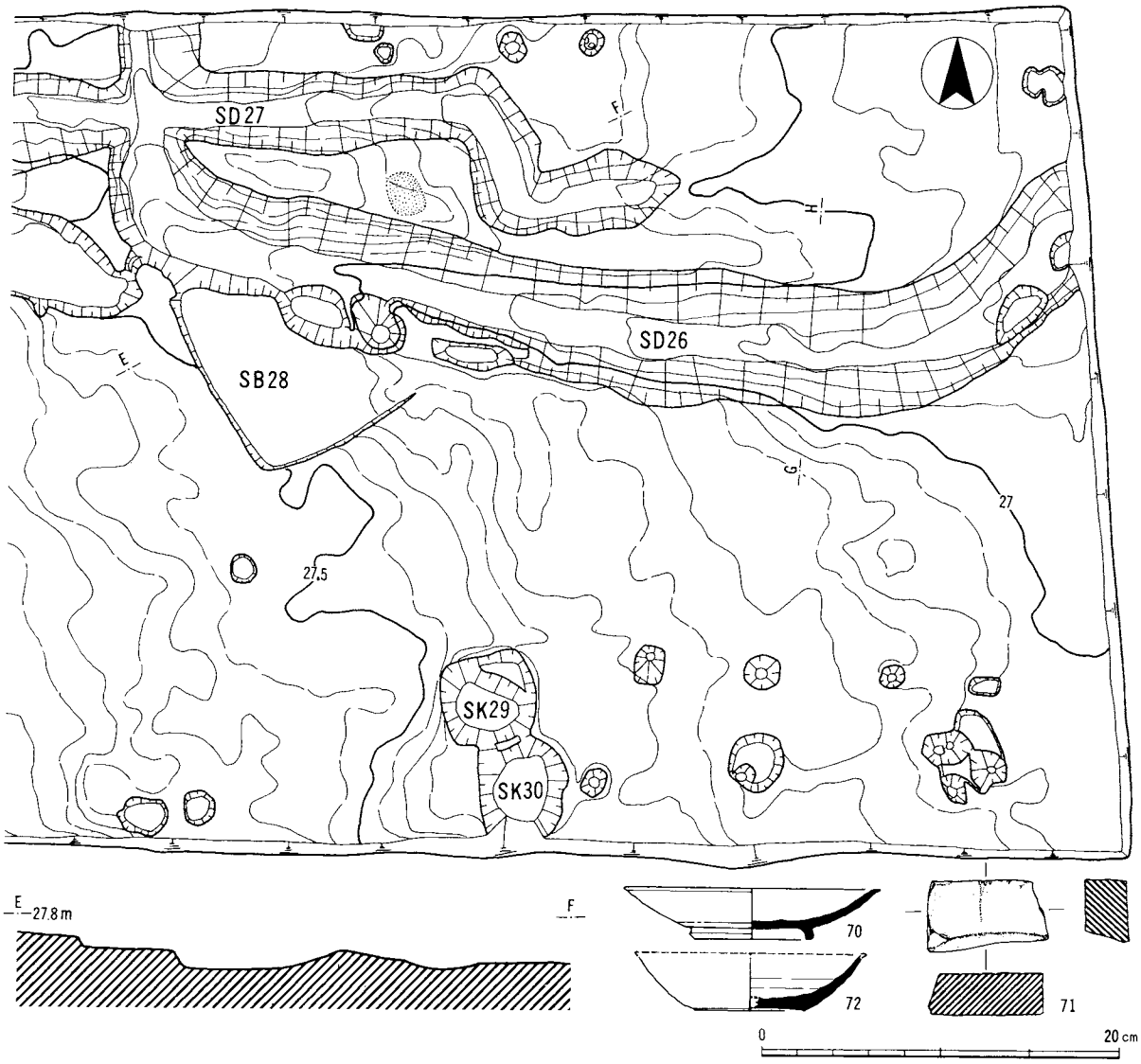
ＳＤ41（第９図）

ＳＢ42（竪穴住居）の東方にあるほぼ南北方向の溝である。現存長８ｍ、幅80cm、深さ15cm～20cmである。灰釉椀等平安時代後期の遺物が出土している。

灰釉椀（38・39）　いずれも底部の破片である。底部はヘラケズリされ、高台がしっかりとつけられている。内外面とも釉がかけられている。つけがけによるものか否かは不明である。器壁もうすく、全体にていねいなつくりである。

ＳＫ７・８・９（第４・５図）

ＳＫ７は、ＳＢ１（竪穴住居）の東側、ＳＤ10の北端にあり、ＳＤ10を切る。１ｍ×１ｍの半円形で、深さ30cmである。ＳＫ８・９はともにＳＢ２（竪穴住居）の中にある。ＳＫ８は、直径1.2mの円形で深さ20cm、ＳＫ９は１ｍ×2.5ｍの楕円形で深さ50cmである。ＳＫ７・８・９とも出土遺物がなく、時期を決定できないが、ＳＫ８・９については、土坑の上に床をはってＳＢ２を建てているため、ＳＢ２より古いと推定できる。



第16図　ＳＤ27・28、ＳＢ28、ＳＫ29・30実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）70; ＳＤ26、71; ＳＫ29、72; ＳＤ32

ＳＫ29・30（第16図）

ＳＢ28（竪穴住居）の南方にある。ＳＫ30は発掘区の南壁に接し、ＳＫ29はＳＫ30の北に接している。両者の切り合いは明らかでない。いずれも一辺１ｍほどのほぼ正方形で、深さは30㎝～40㎝である。須恵器杯身、同蓋片や、土師器片が少量出土しているが、図化できるものはなかった。

ＳＫ37（第17図）

ＳＢ38（竪穴住居）の南方にある。直径約２ｍの円形土坑で、深さは40㎝である。須恵器椀、土師器甕片などが出土している。平安時代初期の土坑である。

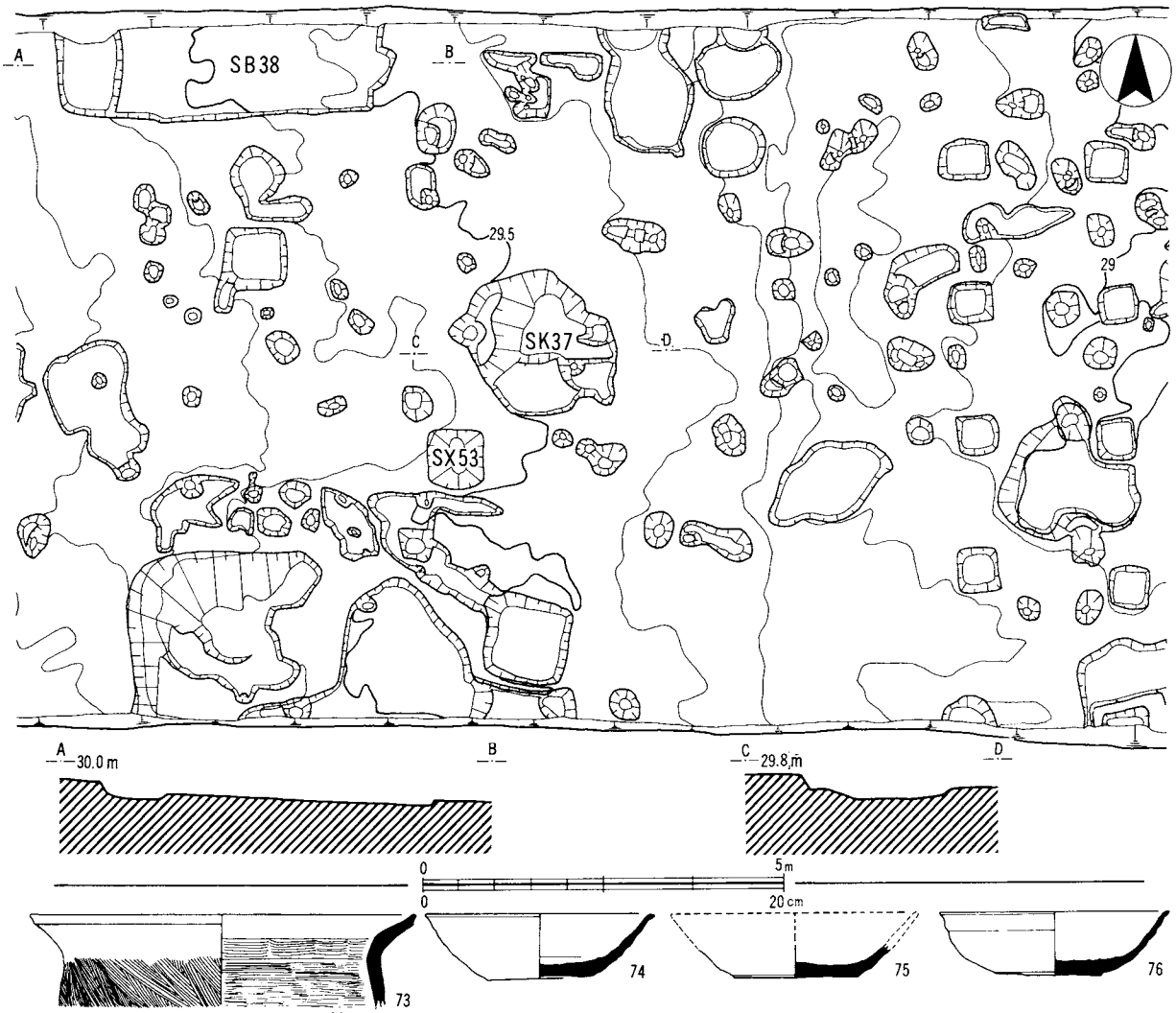
土師器甕（73）　よく外反する口縁と垂直な胴部とからなる。くびれ部分はやや肥大する。口縁端部は上方に引きあげられている。口径21.4㎝で灰褐色である。調整方法は胴部内外面ともハケ、口縁部はナデによるものである。

須恵器杯身（74～76）　いずれも糸切りの厚い底部と内弯する薄い口縁部をもつ。特に75はよく内弯している。76は底部の破片のみである。高台はもたない。74は口径12.8㎝、器高3.6㎝、75は14.8㎝、3.5㎝で、76も同規模であろう。75と76の底部外面には墨書されているが、字形は不明である。

ＳＫ39（第９図）

ＳＤ41の南東４ｍにある。北東－南西を長辺とする長方形で大きさは２ｍ×１ｍ、深さ15㎝である。灰釉椀のほか、須恵器大型甕片などが出土している。平安時代後期の土坑である。

灰釉椀（36）　底部の破片で、高台部の径は７㎝。糸切りで、平らなうすい底部に細めの高台がしっか



第17図　ＳＫ37、ＳＢ38、ＳＸ53実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）73～76;ＳＫ37

りとつけられている。釉は、内外面ともにみられる。

ＳＫ40（第９図）

ＳＤ41の北東にある。不整方形で東壁がはっきりしない。一辺およそ2.5m、深さは西側で15cmである。平安時代後期と思われる灰釉椀などが出土している。

灰釉椀（37）　口径16.2cm、高台5.0cmのものである。底部はヘラケズリされ、小さめの高台がしっかりとつけられている。器壁はやや内弯する。内面にハケヌリと思われる釉がかかっているが、残りはよくない。

ＳＫ44（第12図）

ＳＢ43（掘立柱建物）の北西角近くにあり、南北を長辺とする長方形の土坑である。大きさは1.7m×0.8m、深さ15cm～20cm。須恵器杯身などが出土し、平安時代初期のものである。ＳＢ43との関係は不明である。

須恵器杯身（58）　約⅓程度の破片である。口径12.0cm、器高3.9cmで青灰色をしている。底部は糸切りのあとヘラケズリされており、中央部がうすい。口縁部は、やや内弯ぎみにたちあがり、口縁部はうすくなる。ロクロナデによって調整されている。

ＳＫ46（第10図）

ＳＢ47（掘立柱建物）の東方にある不定形の土坑である。東西1.5m×南北1.2m、深さ15cmの規模をもつ。須恵器杯身などが出土しており、平安時代初期の土坑である。

須恵器杯身（48）　口径13.3cm、器高4.2cm。焼成不良で橙色をしている。底部外面に10本余りのヘラ痕がのこっている。口縁部は直線的にたちあがり、口縁部に至ってうすくなり外反する。ロクロナデによる調整であろう。

ＳＫ52（第10図）

ＳＢ45（竪穴住居）の東方で、ＳＢ49（掘立柱建物）の北西角の柱穴を含むように位置する。東西２m×南北１mの長方形で深さは40cm。皿や、灰釉椀などが出土しており、平安時代後期の土坑である。

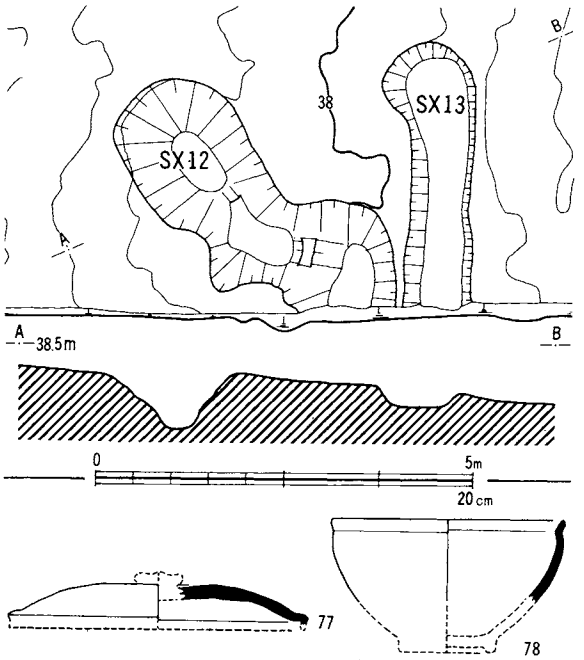
灰釉皿（53）　口縁部⅓の破片で、口径18cmである。内面に一段の段をもつ。全体に直線的かやや外反ぎみである。つくりはていねいで、特に内面はよくなでつけられている。

灰釉壺（57）　口縁部⅓の破片で、褐色をしている。口径は18.8cm。口縁は外反しつつたちあがり、端部に至って下を向いておれまがり垂直に近い面をつくったあと、さらに外に向いて引き出されている。全体にロクロナデによる調整である。

灰釉椀（54～56）　底部、高台から口縁までの⅕片（56）、口縁部片（55）、底部片（54）の計３点。54は厚い底部から口縁が内弯しながらたちあがり、端部はさらに内傾している。高台は真円のしっかりしたもので内弯する。全体に灰白色である。口縁部内面には淡黄色の釉がわずかに残っている。ロクロナデによって調整されている。55は、内弯する口縁部の一部である。口縁端部は鋭く外反する。内外面ともに灰釉がかかっている。器壁はうすく、ていねいなつくりである。56は、高台を含む底部の破片で、内面の一部に灰釉がかかっている。高台は直線的でまっすぐ下を向く。黄灰色である。

ＳＸ12・13（第18図）

ＳＢ14（竪穴住居）の西方12mのところにあり、ともに石溜めである。ＳＸ12は直径１m～1.5mの土坑が３つかさなった形をしており、深さは40cm～80



第18図　ＳＸ12・13実測図（１：100）
遺物実測図（１：４）77～78;ＳＸ13

cmである。ＳＸ13は、幅90cm、現存長3.5m、深さ25cmの溝状をしている。ＳＸ13からは須恵器杯蓋、天目茶椀などが出土している。

須恵器杯蓋（77）　口縁端部とつまみ部を欠く。口径16.0cm、推定高約3cmで、黄褐色である。口縁部はヨコナデ、天井部外面はヘラケズリされている。

天目茶椀（78）　口縁部の破片である。口径12.4cm、推定高7.0cmを計る。黒褐色の釉が内外面にあつく施され、素地は淡褐色を呈する。くびれ部はそれほど極端ではない。口縁部は丸く、内面に浅い沈線がめぐる。

ＳＸ53（第17図）

ＳＫ37の南にあり、一辺50cmの正方形をしている。深さは10cmである。出土遺物はなかったが焼土や炭が検出され、中世の火葬墓と考えられる。

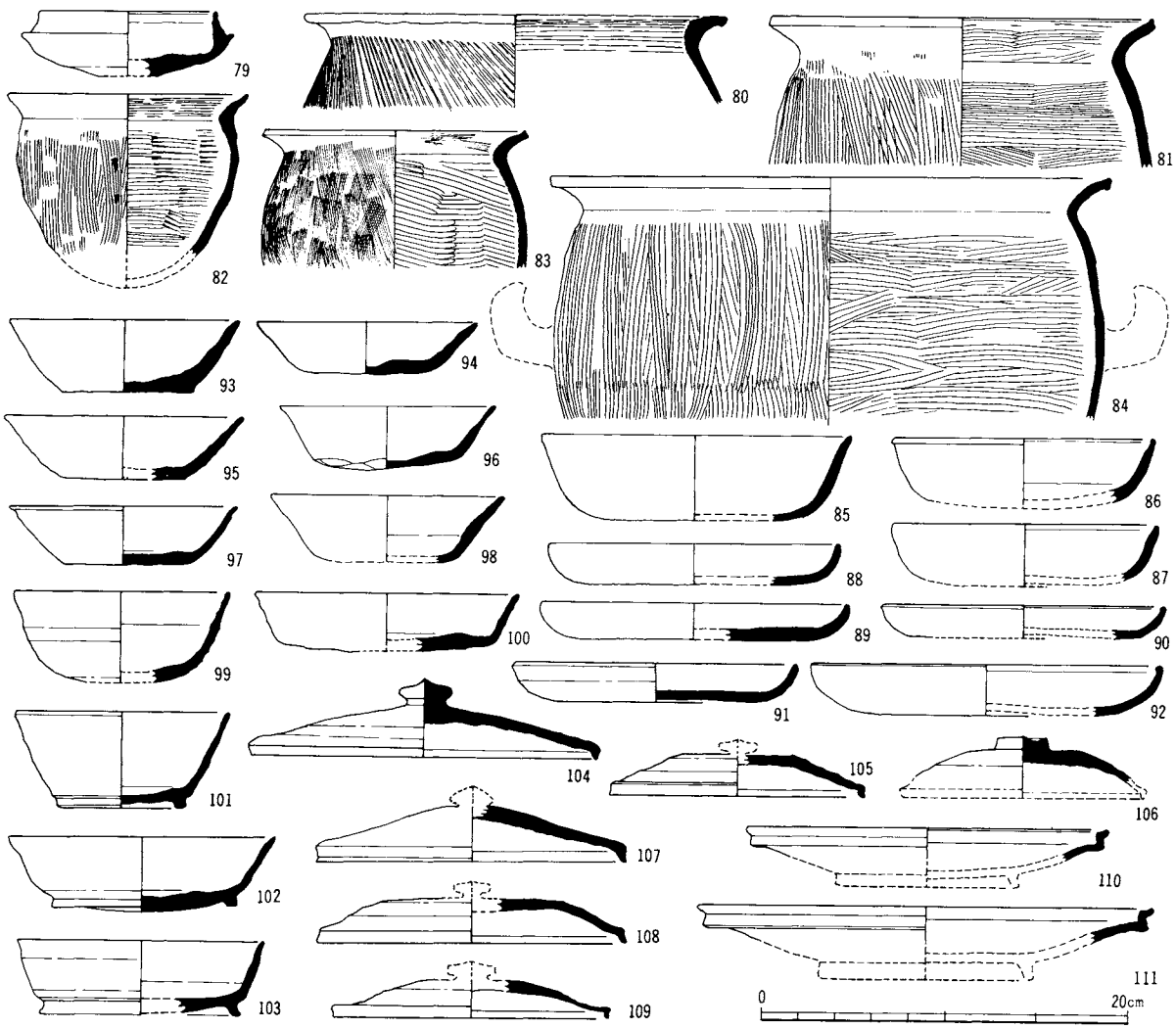
4．その他の遺物

包含層出土の遺物（第19図）

須恵器杯身（79、93～103）　79は古墳時代後期のもの。そのほかは奈良時代以後のものである。101～103は高台を有する。

79は、ヘラケズリされた厚い底部をもつ。口縁部は基部は厚く、しだいにうすくなる。端部はわずかに内傾し、まるくしあげられている。口径9.6cm、器高3.5cmで、淡い青灰色をしている。

93～99は、水平の底部と外反しながらたちあがる口縁部とからなる。口縁端部はまるくしあげられるが、外を向いたもの（97）もある。99は丸味をおびた底部から口縁がなだらかにたちあがるもの。青灰



第19図　遺物実測図（１：４）包含層

色で、口径11.8cm、器高5.0cmである。100は、水平な底部、やや外反しながらたちあがる口縁でまるい口縁端については93～98に同じだが、器高に比べ口径が大きい。口径14.4cm、器高3.1cmである。

101～103は、断面四角形の、しっかりした付高台を有する。101は、他のものより径が小さく深い。

土師器甕（80～83）　80は褐色で、胎土が粗く焼成もあまい。口縁端は厚く、よく外反する。内面には横方向の粗いハケメがみられる。胴部外面にも縦方向の粗いハケメが施されている。

81～83は、比較的胎土は密で、焼成もよい。81は、さほど張らない胴と外反する口縁部をもつ。口縁端部は垂直に近い面をなす。胴部外面は縦、口縁部内面と胴部内面は横方向のハケメで調整されている。82は、半球状の胴部と外反する口縁部、まるい口縁端部をもつ。くびれ部は肥大する。胴部の内外面と口縁部内面はハケメで調整されている。色は暗褐色で火を受けたと思われる。83は、ややまるみをもつ胴部と外反する口縁部をもつ。くびれ部は肥大する。胴部内面のハケメは粗く深い。

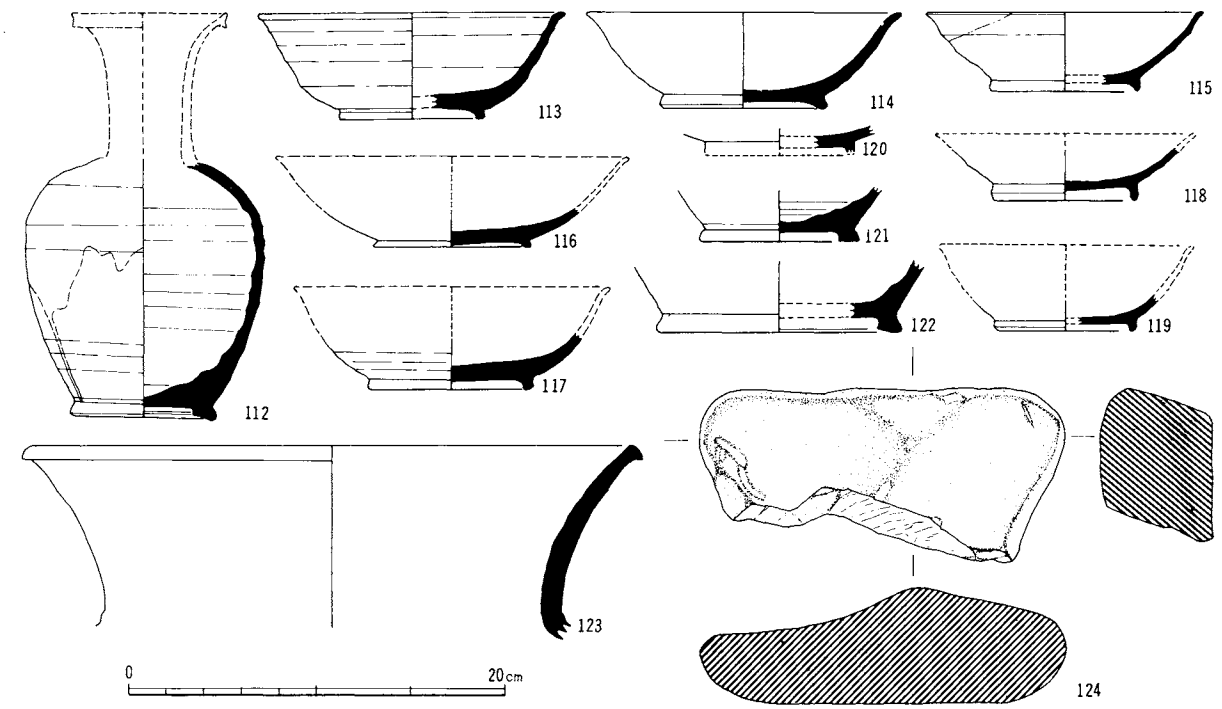
土師器鍋（84）　赤褐色で、全体にうすく均一な厚さである。口縁部は外反し、端部は垂直な面をもつ。胴部内外面ともハケメによる調整がなされている。

土師器椀（85～87）・皿（88～92）　ほぼ水平な底部からなだらかにたちあがる口縁部とからなる。口縁端部は、まるくつくられるもの、段をなすもの、内側がやゝ肥厚するものがある。いずれも赤褐色ないし茶褐色で、ヘラミガキまたはナデによってていねいにつくられている。

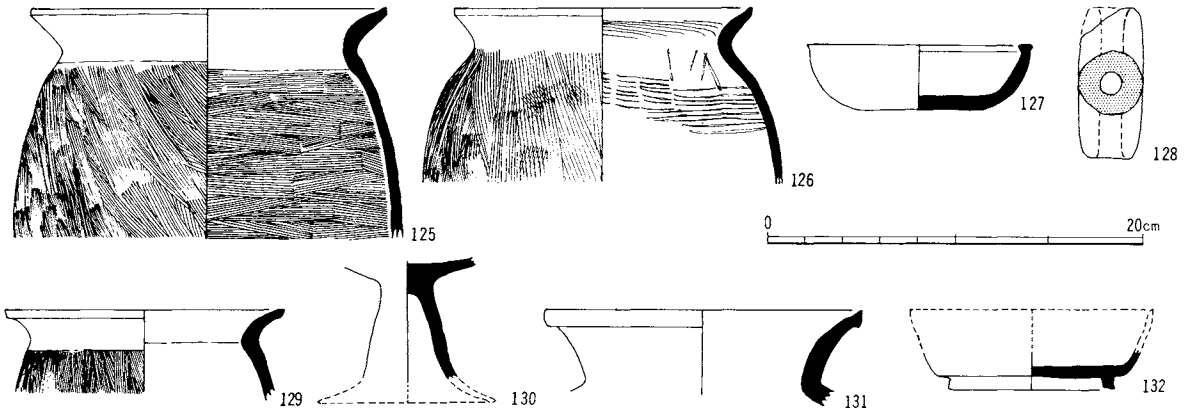
灰釉盤（110～111）　蓋とも考えられるが、ここでは一応皿とした。ともに同じ型で、口縁部の一部である。底部からなだらかにたちあがり、段の手前で外反し、一旦垂直ないし内傾ぎみにおりまげられ、さらに外に向ってもう一度おりまげられる。口縁端部はまるく、やや上を向く。

灰釉長頸壺（112）　頸部を欠く。胴部径12.6cmで灰色である。肩はさほどはらず、まるみをおびる。底部は平らで、底部と胴部の境に太い高台が八の字につく。肩部には灰釉がかかる。平安時代初期のものである。

灰釉椀（113～119）　いずれも⅓～⅕の破片である。高台は、個体差はあるがいずれもしっかりとしたものである。特に115、118、119は薄手で背が高く、やや内弯する高台である。口縁部に向かっては、よく内弯するもの（113、117、119）や、内弯するが、浅いもの（114、116）、どちらかというと直線的であるもの（115、118）がある。口縁端部は、113～115



第20図　遺物実測図（1：4）包含層



第21図　遺物実測図(1：4) 125～128;水谷氏、129～132;伊藤氏

が、外に向かって引き出されている。115、116、118、119は器壁がうすい。115には灰釉が口縁の一部にかかる。いずれもロクロナデによるていねいなつくりである。

緑釉皿（120）　高台部分の破片であるが、皿か、浅い椀であろう。高台部分の径は、約6 cm、水平な底部から直線的に口縁に向かう。全体に黄緑色の釉がうすくかかる。

灰釉壺（121、122）　長頸壺もしくは広口壺の底部と考えられる。水平な底部と直線的にたちあがる体部とからなる。境目には断面四角形のしっかりした高台がつく。高台部径は、8.4cm（121）と13.0cm（122）で、いずれも灰色である。

須恵器大甕（123）　口縁部の破片である。外反しながらうすくなり、口縁端部はななめ下に引き出されている。口径33.2cmで灰白色である。内面には自然釉がかかる。

砥石（124）　砂岩質の砥石で、色は黄褐色である。上面を二方向に使用したものと思われる。現存長20cm。

水谷清太氏畑出土の遺物（125～128）

土師器甕（125、126）　いずれも口縁部とそれに続く胴の½～⅔である。口縁部は外反し、肥大する。胴部はさほどはらず、断面はうすい。調整は、ともに胴部外面はタテ、内面はヨコ方向のハケメである。126の方がややあらい。また、126は口縁部の内面にもヨコ方向のハケメが施される。125は口径19.0cmで淡褐色、126は15.9cmで淡赤褐色である。

椀（127）　約⅓の破片である。口径12.0cm、高さ3.5cmで、底部外面以外は、緑色の釉がかかる。断面はほぼ均一なあつさで、体部が内弯しながらたちあがる。口縁部に至ってくびれ、口縁端は水平な面をつくる。胎土、焼成ともよく、室町時代までくだるものであろうか。

土錘（128）　長さ8.0cm、直径3.5cmのもので、中央に直径1.2cmの孔が通る。胎土には、1mmほどの砂粒を含んでいる。

伊藤淳次郎氏駐車場出土遺物（129～132）

土師器甕（129）口縁部の一部である。口径は14.9cmで淡褐色である。口縁部はよく外反し、くびれ部分は肥大する。口縁端は丸くしあげられている。胴部は直線的である。胴部外面はタテ方向のハケ、ほかはナデによって調整されている。

土師器高杯（130）　脚部のみ残存していた。胎土は良好だが、焼きがあまく、保存はよくない。調整技法も不明であった。赤褐色である。

須恵器甕（131）口縁部の一部である。口径は16.8cm、黒灰色を呈する。口縁部は外反しながらたちあがり、口縁端に至ってくびれ、垂直にちかい面をつくる。胎土は精良で、焼成もよいが、焼きぶくれがみられる。

須恵器杯身（132）　底部¼片。底部径約10.5cmで、灰色である。水平な底部から、体部が斜め上方に向かってたちあがる。高台は断面四角形のしっかりしたもので、八の字型にしっかりとついている。

Ⅳ．結　　語

約2,900㎡の発掘調査は多度町におけるはじめての本格的な調査であった。古くより知られている柚井貝塚との関連、多度小学校建設の際に出土したといわれる土馬の背景は、ひいては多度神社の存在にも波及する問題を内包しているものと思われる調査であった。

総面積約240,000㎡に及ぶ広大な遺跡のほぼ中央部を幅12mで東西に横切る格好での調査の結果、奈良時代後半より平安時代にいたる竪穴住居、掘立柱建物や平安時代後半頃の土坑、溝、掘立柱建物を検出し得た。これらの遺構の分布を見ると、分布調査や試掘調査の結果からの予想とはやや異なる。それは当初、標高42m付近より高所には遺跡がひろがらないと考えていたが、調査区の最西端部からも竪穴住居が検出されており、この付近にも一群の遺構がひろがっていることが明らかになった。そして、この個所から東へ約60mに亘って遺構が殆んど検出出来ない地区がある。めぼしい遺物の出土も少ない。この遺構、遺物の少ない個所をすぎると、再び標高37m付近より竪穴住居、掘立柱建物、土坑などの遺構が検出されるようになる。このような状況で当遺跡を見直してみると、相当数の遺構がこの台地上に存在していたと思われる。

竪穴住居は総数17戸が見つかっている。密集はしないが、二戸あるいは三戸程度のまとまりがある。重複したものもあり、建て替えを行なったものと思われる。住居の規模は高所では一辺5.5m程度であるが、中位より低位にかけてはＳＢ48やＳＢ28のように一辺３ｍ足らずとやや小規模なものが多いようである。いずれも住居の掘り方は浅く、部分的に周溝が見られたり、柱穴が不明瞭であり、カマドを持つものがあるなど、四日市々西ヶ広遺跡や明和町斎宮跡などに見られる同時期の竪穴住居と通有のものである。竪穴住居の時期についてはいずれも奈良時代末もしくは平安時代初頭と考えている。出土する土器を猿投編年に比定すれば鳴海32号窯期より折戸10号窯期に属するようであり、古く出土した土馬もおそらくこの期のものであろう。

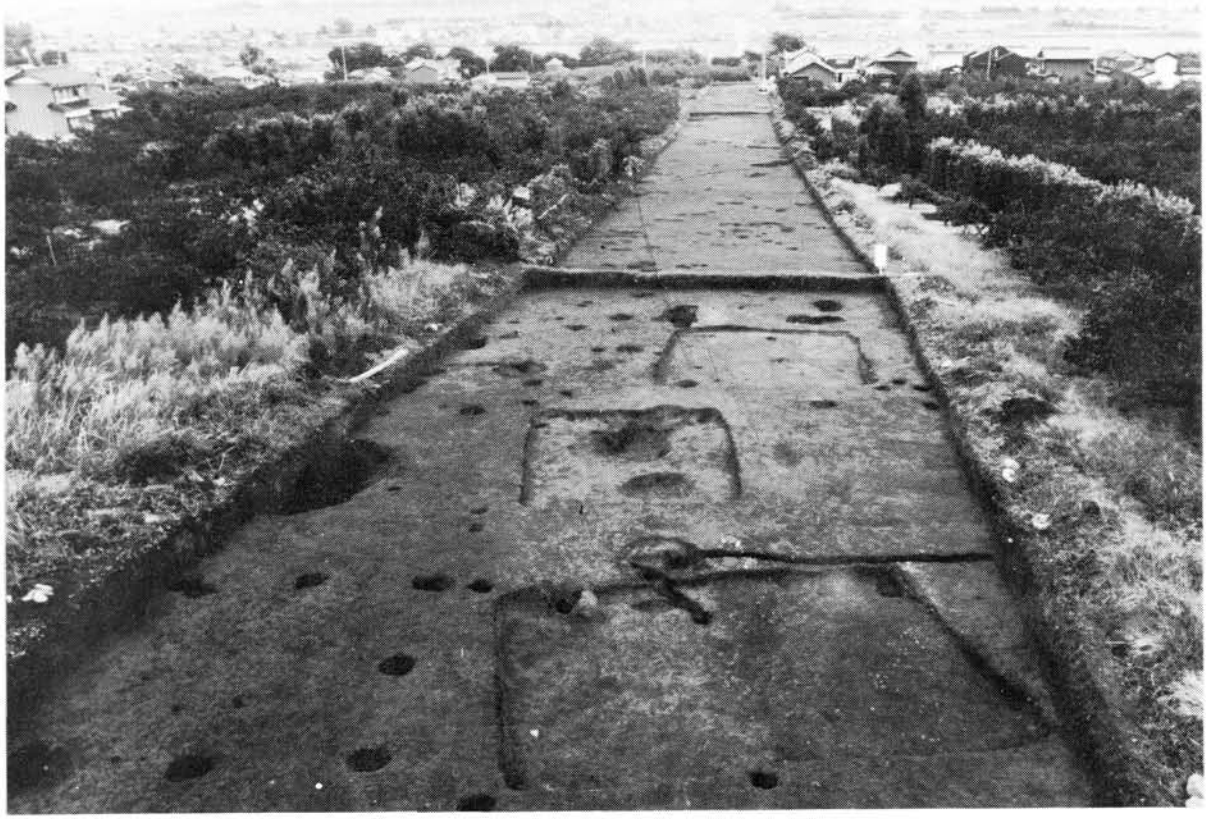
掘立柱建物は総数９棟を検出している。西側の高所に位置するＳＢ５や低位のＳＢ35を除くと、標高34ｍより31ｍの個所に比較的まとまっている。これらの中で、ＳＢ24、ＳＢ51、ＳＢ47、ＳＢ43は柱通りをほぼ揃える建物であり、規格性をもった建物の可能性がある。先述の竪穴住居よりもやや後出のものと考えている。他の掘立柱建物はその方向が異なり、平安時代後半頃のものであろうか。ＳＢ35は５間×４間以上の総柱の建物である。柱掘り方は比較的しっかりしているもので、一見奈良時代の倉庫かとも考えられる。この種の総柱の大規模な掘立柱建物は最近多気町カウジデン遺跡をはじめ各地の遺跡で見つかっている。それらは平安時代後半頃と考えられる例が多いようである。掘立柱建物以外の土坑や溝、ＳＤ23、ＳＤ41、ＳＫ52からは黒笹90号窯期、折戸53号窯期の灰釉陶器が出土しており、掘立柱建物もこの時期と思われる。

第Ⅱ章でも述べたように、遺跡の存在する台地は水の便さえ考えれば住みよい土地柄であったことと思われる。古墳時代の遺物も少なからず見られるが、本格的にこの地に集落が営まれるようになるのは奈良時代末頃であった。その時代は多度神社の存在と、かかわりがあるものかもしれない。著名な柚井貝塚をはじめ小山廃寺と当地は伊勢国でも有数の政治文化の先進地域であったのであろう。今回の調査においてその一端をうかがい知ることが出来た。今後の調査の増加によって、更にその実態が明らかになるものと思われる。

図　　版

遺跡遠景（北西より）

遺跡遠景（東上空より）



調査区西部分近景（西より）

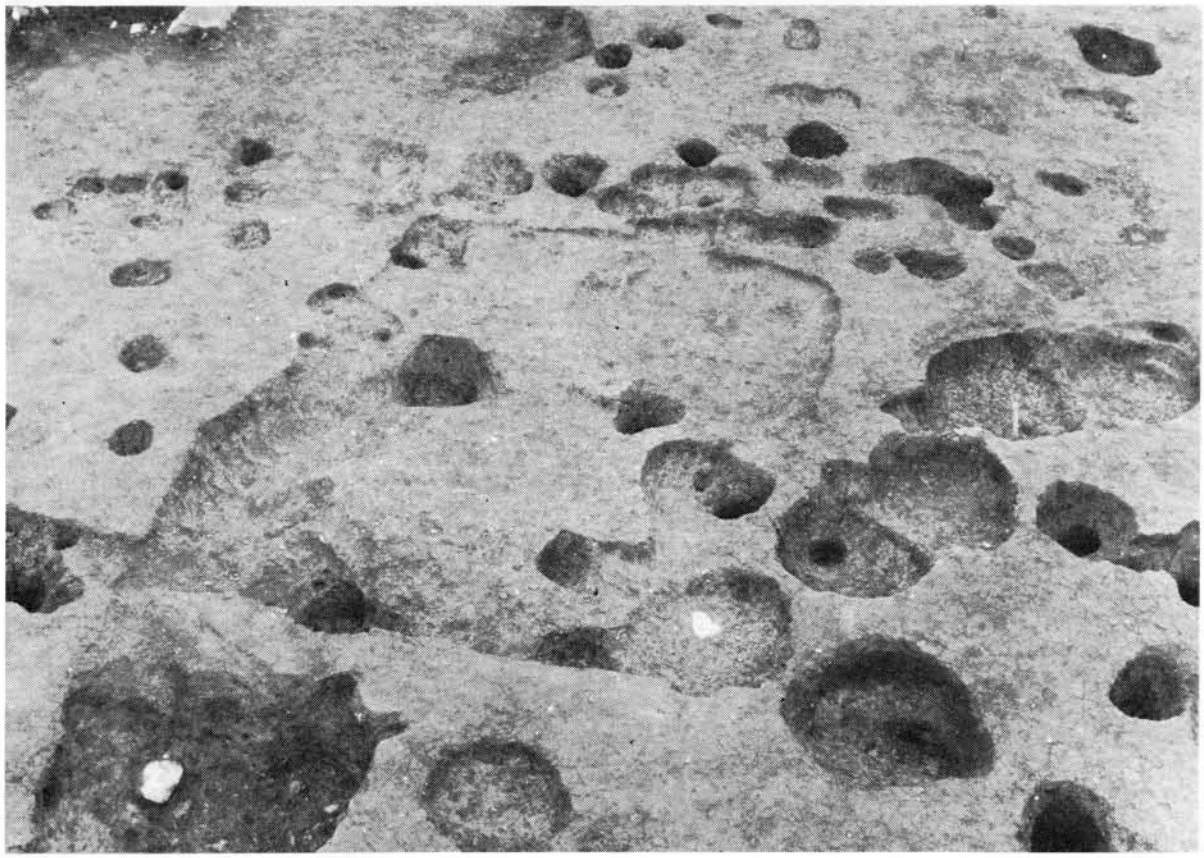
調査区東部分近景（西より）

SB1・2・3（東より）

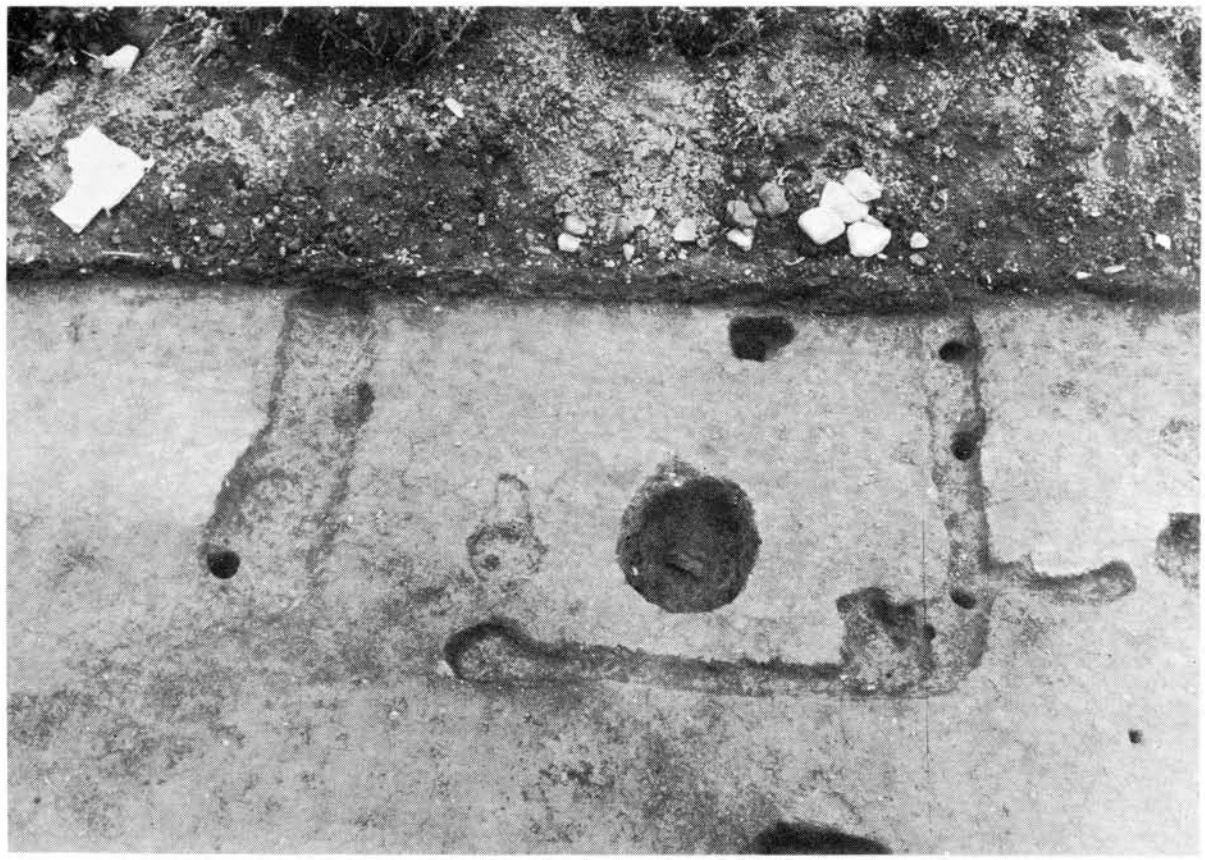
SX12・13（北より）

SB14・15・SD16（東より）

SB17・18・19・20・SD23（東より）



SB45・SK52（東より）



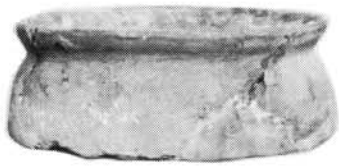
SB48（北より）

ＳＢ42・ＳＤ41（東より）

ＳＢ38（南より）

ＳＤ34・ＳＢ35・36（西より）

ＳＤ26・ＳＢ28（西より）


3

4

8

5

6

7

15.

22

20

26

23

28

27

35

29

40

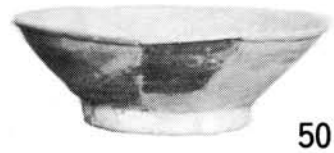
出土遺物（1：3）

32

46

45

48


50

53

56

58

70

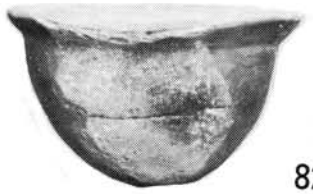
72

74

76

77

79


82

85

87

88

89

91

出土遺物（1：3）

92

95

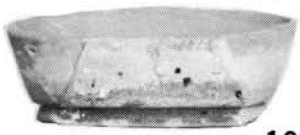
97

99

100

101

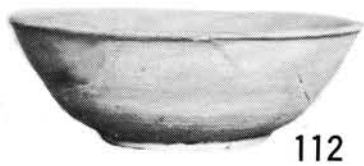
102

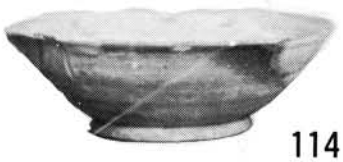

103

104

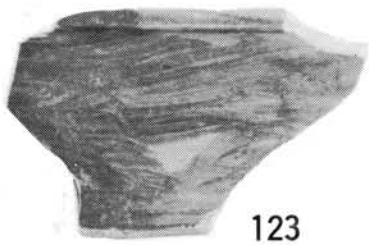
105

107


112


114

115


123

127

112

69

出土遺物（1：3）

昭和57(1982)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告52－1

天王平遺跡発掘調査報告Ⅰ

昭和57年3月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　第一プリント社